

41721

教科書文庫

4
810
41-1932
200030 1608

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

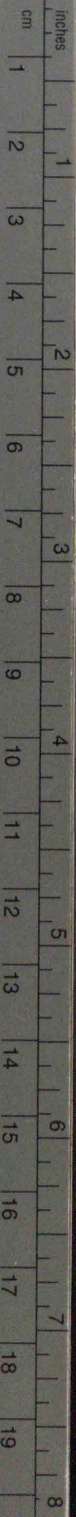


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Sa19
資料室

中學新國文 卷五

文部省檢定
昭和七年八月二十四日
中學國語漢文



文學博士 笹川種郎編

中學新國文 卷五



株式會社 帝國書院發行

資料室

375.9
Sa19

小冊子

- 七八 雲先生
- 八 松江の曉
- 九 巴里の新樹
- 一〇 平和成る
- 一一 内の聲
- 一二 阿新丸
- 一三 人の香
- 一四 學者の苦心
- 一五 苦行者と蛙
- 一六 ものの上
- 一七 大雅堂と蕪村
- 一八 天下第一の畫工
- 一九 輝く海

- 厨川白村 三
- 小泉八雲 三
- 吉江孤雁 三
- 近衛文麿 五
- 高村光太郎 五
- (太平記) 六
- 竹越三又 七
- 芳賀矢一 七
- 佐藤春夫 八
- 富士谷御杖 九
- 藤岡作太郎 九
- 渡邊華山 九
- 吉江孤雁 一〇

- 二〇 旅人の山
- 二一 生命の芽生
- 二二 震災所感
- 二三 詩聖ダンテ
- 二四 オリンピヤ
- 二五 かりがね
- 二六 水鳥の羽音
- 二七 功名心
- 二八 國民と皇室
- 二九 國民の歌
- 三〇 ペニスの商人

- 小島鳥水 二三
- 相馬御風 一九
- 下位春吉 二七
- 黒板勝美 二三
- 島崎藤村 一四
- (平家物語) 一四
- 竹越三又 一五
- 芳賀矢一 一六
- 北原白秋 一六
- 坪内逍遙 一六



(寫 謹 作 英 田 和)

下 陛 上 今

目
次
終

目
次

目次



本文は
崇敬體
敬語體

中學新國文

卷五

一 乾德

今上陛下、いまだ皇太子であらせられた當時は、やく海外御見學の途に上らせられ、列強官民の尊敬と國民上下の景慕とを御一身に集めさせられた。先帝の偉業を繼がせられてこのかた、外は世界の平和を念とし、國交の親善を重んじ、内は文化の進歩を圖り、國運の隆昌を期せられ、夙夜聖慮をつくさせ給ふ乾德の高大なるは、治く内外の仰望するところである。

陛下天資英明、政治産業軍事教育は申すまでもなく、國民の體育につきては、深き御理會を有していらせられることは、東宮におは

しましたころの御事實を傳へたる「體育の諸問題」中の次の一文によりても拜察し得られる。

「先年御外遊の御歸途などには、印度洋の上で、しかも暑熱の

光華明彩

之神德也

東御事命

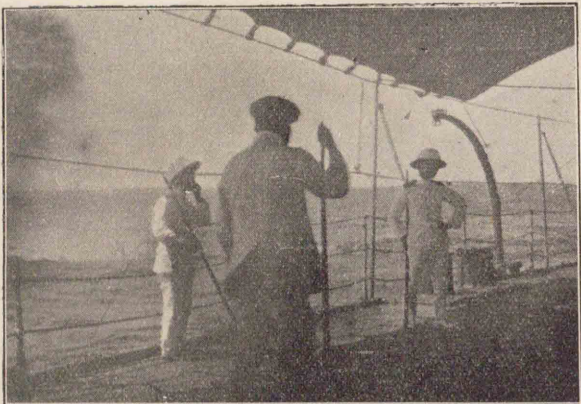
さかりに、水兵の用ひる土俵の上で、お附の人々を相手に、勇敢に角力を遊ばされ、二、三度づつ立てつゞけに相撲はれても、些か御

疲労の御氣色さへ現されなかつたといふことである。このやうな御元氣を有せられるのも、日頃體育といふことを疎略に遊ばされない爲であらうと、有難く拜察するのである。

水泳も御歸朝の後、一層御熱心に御練習遊ばされ、特に深い

香取艦上のデ
ツキゴルフ御
競技

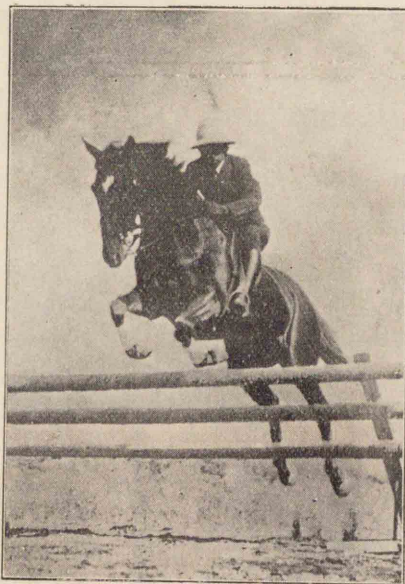
カ。ハイ



も御倦怠の色があらせられぬと申すことである。また、試

御趣味を有したまふやに拜聞する。殿下が御多忙の御身を以て、或は専門學校のボートレースを御覽あらせられ、或は青年團の競技會に行啓あらせられるのは、殿下御自身の御趣味よりせられるだけでなく、御思を深く國民體育の向上に致されるからであらうと拜察し、誠に感激に堪へない次第である。

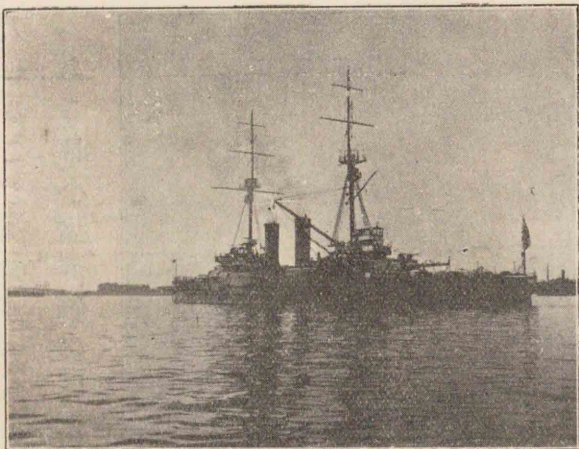
障礙物御飛越の殿下



合の場合に、殿下のいらせられる組が形勢不利となり、到底勝算の立たないやうな場合にも、そのまゝ見きりをつけて中止されるやうなことは決してなさらないで、最後まで堂々と奮闘を続けになると申すことである。殿下のこの御態度は、畏多くも、正に真正なるスポーツマン精神の表現と申し奉らねばならぬ。

なほまた殿下には、競技運動に對して非常に研究的な態度を持たせられ、先年富士の裾野に行啓あらせられて、海拔二千餘尺の馬返しで、スキ一の御練習をなされた時も、初の間は徹底的に基本の練習をなされ、まづそれが完

御度歐の御召艦香取



成するまでは、次の練習にお移りにならなかつたさうである。とかく基本練習をおろそかにして、早く競技をやりたがることは、我が運動家の通弊であるが、彼等は殿下のこの御態度に鑑みるがよいであらう。

なほ「皇太子殿下御外遊記」には次の御逸話が傳へられてある。

「シンガポールで、在留邦人の某氏が可愛い小猿を献上した。殿下は殊の外お喜になつて、晝は上甲板に繋ぎ、夜は中甲板の小屋において御愛玩になつた。ところが、この小猿は中々いたづらもので、艦具の螺旋をとつては、口に

入れることが度々であった。

ある日、小猿が例のいたづらを始めた。水兵はその螺旋を

取戻さうと苦心したが、いたづら

ものはこれを口の中に入れて、頬

張ってしまった。この時、殿下は

甲板にお出ましになつて、水兵と

小猿とが小競合をしてゐるのに

お氣附になつた。殿下は御微笑

なさりながら、「どうしたのか」とお

尋ねになつた。水兵は振返つて、

殿下のお姿を拜すると敬禮をし

ながら、「猿が螺旋を抜いて口に入

れました」と申しあげた。殿下は軽く「さう」とお肯きになつて、



倫敦ウイクト
リヤ停車場よ
リバツキンガ
ム宮殿への函
簿

妾の中もかく

あゝまがし 於き

やうり

朝日に目を流

おほうまの

まの世

東を侍渡去入江寺敷を

よ』と、殿下は氣の毒さうな御口調で、直立してゐる水兵に仰せ

られた。

かりそめの御言葉にも、ものをあはれませ給ふかぎりなき御優

しさのほどが、拜察されるのである。

御製

陛下にはまた敷島の道にも御志深く折にふれては國を思ひ民を恵む御聖慮をもらさせ給ふと承る。その御製に、
世の中もかくあらまほしおだやかに

朝日にほへる大海のはら

と申すのがある。四海の平和を希求せられた御聲である。かくばかり平和を大御心にかけてさせたまふ聖天子を戴きまつるは、我が國將來のためにも、また世界のためにも、まことに祝福すべきである。

二 櫻花國

佐々 醒雪



あはし

花見といふことが年中行事の一つとなつて、老若男女、貴賤貧富、打連れて花下に遊ぶといふ風俗は、西洋にも支那にもない。全く日本獨特のことである。

醒雪は號
文學博士
大正六年
四月
歿
十六

吉野の櫻
(菊池芳文筆)



蓋し、世界には日本の櫻のやうな派手やかな花もなく、また日本人ほど花好きな國民もあるまい。支那の桃李は、専ら彼の國の詩人に歡ばれ、西洋の薔薇や草花は、主としてその上流社會に玩ばれる。然るに、日本では、花盛の噂には、その日ぐらしの貧困者でさへも、うかれさせられるのである。朝日に匂ふ山櫻のやうな大和心は、畢竟その間から生まれて來たのであらう。

和歌は千年の昔から、何よりもまづ月花を好題目としてこれを詠じた。人類がまだ野蠻の域を脱しない時代に、我が大和民族のみは、既に櫻花の美にあこがれる風流心を持つ

青丹よし
萬葉集の歌

奈良の櫻

見渡せば
古今集の歌



てゐたのである。

さりながら、遠い日本の上代には、まだ今日のやうには、到る處に櫻が茂つて居なかつたに相違ない。

青丹よし奈良の都は咲く花の

にほふが如くいまさかりなり

と謠はれた奈良の都こそは、名にし負ふ八重櫻も追ひく々に栽ゑられたことであらうが、それにしても山城の新都のやうに、

見渡せば柳櫻をこきまぜて

みやこそ春の錦なりける

といふ程の美しい都ではなかつたであらう。殊に花の名所として日本隨一の名ある吉野山にさへ、奈良朝時代にはまだ櫻は一向なかつたらしい。吉野の歌は數へきれぬほど

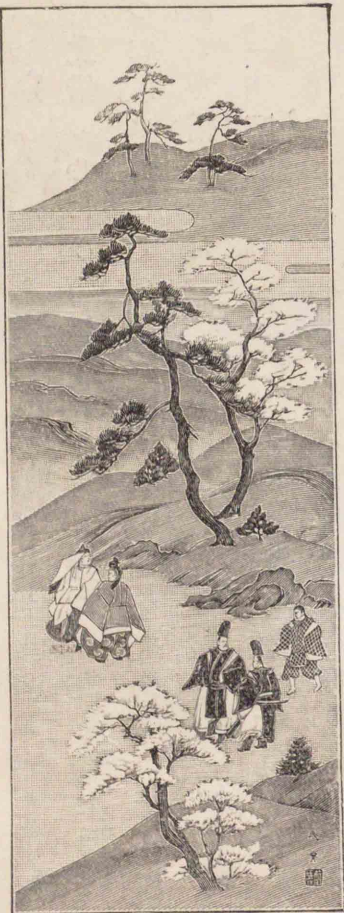
世の中に
古今集の歌

見
王朝時代の花

萬葉集に見えてゐるが、たゞ山川の美しい景色を反復してゐるのみで、とんと櫻は謠つてない。日本が櫻の國となつたのは、蓋し平安遷都以後のことであらう。

世の中に絶えて櫻のなかりせば

春のころはのどけからまし



いふ風俗の始めて盛になつた時代である。今日も櫻狩、明日も花見の宴と、打續いた春の賑はしさ、なかく心にどかにくらす日

と、業平朝臣の詠ぜられた頃、即ち平安朝の初期が、花見と

いつまでか
古今集の歌

もないといふのは、最もよく花時の盛況を偲ばしめる。

いつまでか野邊に心のあくがれん

花しちらずば千世も經ぬべし

愛惜の心にひかれて暮れるも知らず花の蔭にさまよふ様を諛つた歌は、眞にその數が知られぬほどである。まして、咲くを待ち散るを惜しんだ歌は、指を屈するに遑がない。

一朝厭離の心をおこして、佛門に歸依しても、

☆ 花にそむ心のいかで残りけん

棄てはててきと思ふ我が身は

と、西行は自ら怪しんでゐる。花にひかるゝ心は、遍世の僧にも残つてゐたのである。

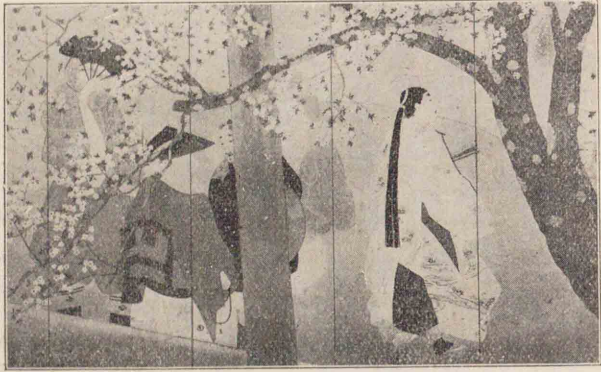
また、吹く風をなこそその關と詠じた源義家や、花や今宵の主人ならましと諛つた平忠度は、武士ながら花を愛づる心は忘れなかつ

花にそむ
千載集の歌

兼好
卜部兼好

徒然草
（隨筆）
枕草紙

平安花見風俗
（松岡映丘筆）



た。源平以後の戦亂の世にも、平清盛は西八條に花見の宴を張つた。吉野朝騷擾の際ですら、田舎者は、花の下にあつまつて酒飲み歌を作ると、兼好は記してゐる。況や足利時代の小康に遭つて、花

見の盛であつた事は、諺曲や狂言によつてさへ歴々と知ることが出来る。かくてこそ、かの潤達な太閤の醍醐の花見といふ、前後無比の大觀櫻會が開かれたのである。

平安朝の花見風俗も、鎌倉室町のそれも、さして懸隔があつたとは見えぬ。時としては、邸内の花見もあつたが、大方は野山に出て、花の下に筵を設け、辨當を開いて、終日遊興に耽つたのである。それも多くは、主なき花で、

見てのみや
古今集の歌

見てのみや人に語らん櫻花

手ごとに折りて家苞にせん



と歌はれたとほり、或は小さい枝を冠にかざし、或は大きい枝を手折つて歸ること
もあつた。併し
花を折ることを
惜しんだ歌も、ま
た古くからある。

花見の宴
(圓山應舉筆)

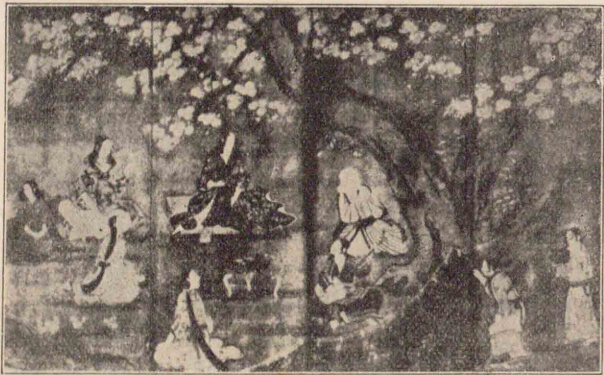
折りとらば
古今集の歌

折りとらば惜しげにもあるか櫻花

いざ宿かりて散るまでは見ん

近世、徳川期に入つては、久しき昌平につれて、花見は愈盛であつたが、その初は頗る殺風景なものであつた。足利期の末には、鑄槍を擔いだお伴を連れて、花見に出ることがあつたと見える。流石

元祿花見風俗
(狩野長信筆)



に戦國武士は、花見にも武備を怠らぬやうに心がけてゐた。然るに泰平な徳川期になつても、なほ寛文の頃までは、小身者さへ、花見といへば態槍持鐵砲持などを従へて出たやうで、武器を携へて威風堂々と練出す花見は、今日から思へば、随分無風流きはまつたものであつた。
しかし、かゝる風俗は久しいものではなかつた。やがて御大身も草履取を従へたのみで、槍や鐵砲は花の山には見られぬやうになつた。これに代つたのが花見小袖の伊達模様で、男女ともに漸く華美を競うて、貞享・元祿の盛期には、花の美も衣裳の美に氣壓されるやうになつた。歌舞音曲も亦盛に演奏されて、果は男女打群れて花の

吉野山
新古今集の
歌

下に踊り狂つた。元祿の花見は、既に風流人のみの花見ではなくなつた。

吉野山去年の枝折の道かへて

まだ見ぬ方の花を尋ねん

と、道もない山陰を辿つて、淋しい花を眺めたのは既に昔の事となり、東山祇園或は清水の花の下蔭に、暮うちまはして花毛氈を布きとりどりの遊興に、蒔繪の重箱に山海の珍味といふ贅澤でなくては、花見らしくは感じなくなつたのである。(醒雪遺稿に據る)

三 明日の故郷

契

沖

契沖
大阪高津圓
珠庵の住僧

こゝろある人にひと夜の宿かりて

なるゝもつらし明日の故郷

契沖筆蹟

真淵

淵

真淵
阿部氏
姓實茂
號は縣居
遠江の人

うらくとのひけき春の心より

にほひいでたる山ざくら花

千

蔭

千蔭

橋氏
姓加藤
號は芳宜園
江戸の人

すみだ川みのきてくだすいかだしに

霞むあしたの雨をこそしれ

蘆庵

庵

蘆庵

姓小澤
名は支中
京都の人

波となり小舟となりて夕ぐれの

雲のすがたぞはては消えゆく

蘆庵筆蹟

景樹
香川景樹の
養子
鳥取の人

有功
姓千種
號は千々廻
京都の人

廣足
姓中島
號は樞園
肥後の人

廣
足
筆蹟

直好
姓熊谷
景樹の門人

照る月のかげのちりくるこゝちして

よるゆく袖にたまる雪かな

駒のつめぬらさぬほかに波よせて

月しづかなるうちいでの瀆

衣うつあら屋も見えてひとすぢの

秋風さむし竹のなかみち

閑秋

秋風さむし竹のなかみち

軒ちかき竹のすゑ葉にはじかれて

景樹

有功

廣足

直好

曙覽

橋氏
姓井手
は志濃夫
酒舍
福井の人

言道
姓大隈
福岡の人

蓮月
名は誠
姓大田垣
女流歌人

蓮月筆蹟

窓のうちにも降るあられかな

影垂るゝ星にせまりてうすぐろき

色たゝなはるおぼろ夜の山

窓に窓むかひあひたるおほ船の

一夜おぼろのなつかしきかな

おぼろ月よの花の下ぶし

おぼろ月よの花の下ぶし

曙覽

言道

蓮月

おぼろ月よの花の下ぶし

言二副

松平樂翁

大塚孝綽
通稱大助
號子裕
(寛政四年
歿)



四 松平樂翁

三 上 參 次

樂翁公とは、白河の城主松平定信をいふ。權中納言徳川宗武の第三子にて、八代將軍吉宗の孫なり。幼名は賢丸といひき。賢丸稟性虛弱にして、殊に幼稚の間は常に病がちなりしが、漸く醫師灸藥の力にて成長したり。七歳の時始めて假名を習ひ、又始めて孝經を讀みたり。學問の師は大塚孝綽とて、田安家の儒臣なりき。

この頃より、はや後年非凡の人となるべきしるし見えて、嬉戲のさまもなにかでわが日の本は更なり、唐土にもわが名を知られん程の偉業をなさばやと思立ちしは、十歳の時なべての小兒の如くならず。

史記
漢の司馬遷
の著

陳蕃
字仲舉
後漢の人

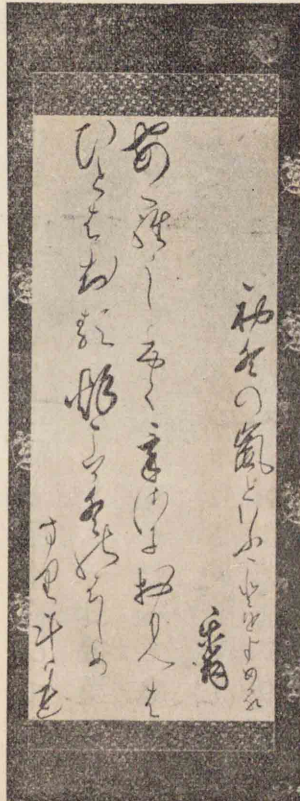
りけり。幼稚の心にもかく奮勵して、行を正しうし、學を勉めければ、十三歳の時早くも自教鑑と題せる小冊子を綴りたり。これを父の卿に見せ参らせしに、卿も深く喜びて、褒美として一部の史記を賜ひ、益これを勵まされたり。一日後漢書を讀み、陳蕃が慨然として天下を廓清せん、の志ありといへる處にいたり、覺えずはたと手をうちて、感歎に堪へざりきとか。蓋し千歳の昔、しかも異域に同感の士を得たるを喜びたるなり。この時徳川氏の天下は未だ後漢の桓帝靈帝などの時の如く亂離の極といふにはあらず。されども泰平年久しかりしかば、社會腐敗の兆は既に大に現れたり。この時に、かくの如き抱負の大なる人の出でしは、江戸幕府の爲に、また我が國の爲に、いかばかりの幸運なりしぞ。

氣概は溢るゝばかりなるに、身體の健康これに伴なはざる人は、概ね性急なる者なり。賢丸は、かゝる人の標本とぞいふべかりけ

る。少しく意に満たぬ事あれば、烈火の如く怒り猛りて、とゞまる所を知らず。儒臣大塚、また近侍の人々も、百方苦心して、或は婉曲に諷し、或は顔を犯して直諫せしこと、度重なりければ、賢丸も漸くその累徳を悟り、太公望の釣する繪をその室に懸けなどし、いたく自ら抑へて、遂に弱冠の頃には、その性行全く豹變するに至れり。己に克つは敵に勝つよりも難し。能く克己の教に従ふこそ眞の

太公望
名は呂尙
臣の文王の

松平樂翁筆蹟



勇とはいふべけれ。他日英名を天下に布くほどの者は、その若き時に於ても、既に

かく著しく他に異なる所あるを見る。

二十歳前後の勉強はた驚くべきものあり。朝は夙に起きて正

それこそ又

格なる書を読み、午餐終れば又案にむかひて申の刻に至る。それよりは師に就いて、或は擊劍使槍、或は弓馬銃術を學ぶ。晩食の後、少しく閑あり。點燈の後、則ち晝間繙きし諸書を鈔録し、又は稗史、野乘などを讀む。元來健かならざる身にか、過度の事をなしかけるより、稍疲勞して肩背などに痛を覺ゆるにいたりしかば、醫師の勸に従ひ、暫く讀書を廢したり。

空しく月日を送るは徒然に堪へず。謂へらく、予幼きより多病なれば、壽を保たん事覺束なし。大丈夫生をこの世に享けし上は、よしや蒲柳の質とはいへ、碌々として瓦礫と共に碎け、草木と共に朽ちなんこと口惜し。せめて予が生涯に成さんと誓ふことを筆にだに殘して、家庭の訓ともせんとて、乃ち病間に筆を執り、或は侍臣に口授して筆記せしめ、國本論、修身錄、政事錄などの諸書を著したり。而してその虛弱なるを憂へ、攝生少しも怠なかりしより、思

の外に年壽を保ちたりき。されどもなほ小心翼々として、少しも養生の規律を紊さず。侍臣にむかひて「予幸にして稍健かになりたれど、人生五十は到底望むべからず。蓋し四十年よりは長かるまじきか。さすればその前に、人の爲す程の事は成し畢へて、人間の本分を盡くしたし」といへること屢なりき。

凡そ大人の事業を成せるを見るに、外より英氣の挫かるゝを防ぎ、内よりは心を勵まして尙幾年の餘生を冀ひ、この事を成就せんと志望を抱ける者多きが如し。定信の主義はこれに反し、決して明日あるを頼むな。今日のことは今日成し遂げよ。明日見んと楽しみし櫻花の、夜半の嵐に散ること多きを見ずやといへり。定信一代の事業は、皆この決心の確乎たりしによる。嗚呼、立志なるかな、立志なるかな。志だに立たば、愚公は山をも移せり、成功豈期し難からんや。(白河樂翁と徳川時代)

愚公云々
話列子にある



松平樂翁
名は定信

五 樂翁のことば

松平樂翁

一 花の咲く頃

花の咲く頃、雨の降りいでたるに、風さへそひぬれば、必ず花のとき雨風の憂さ添ふならひにて、人の世の別れ離るゝことわり見することこそ。さりとはつらき雨かな、うき風かなといふを聞き、雨降るとして五月雨のやうにはあらず、はげしとして夕立のやうにはあらず、風そふとて秋の末つかたの野分、またはこがらしのやうにはあらず、ものを花を惜しめばとて、ことさらに、雨も風も世になきやうに思ひ給ふものかなといひき。(花月草紙)

二 四つの時

四つの時の移り行くけしきこそまたなくをかしきを、咲かざる折の花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふはいとくるし。

風流の道
人

散ればまたこん年は咲きぬべし。いかに心を苦しむとも、霜白く氷かたき折に蓮の咲くべきことわりなし。されど、咲くを待ち散るを惜しむは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。(花月草紙)

三 久しく逢はぬ人

久しく逢はぬ人に逢うては、こは久しく逢はざりけり。安全にてこそと、いふより外もなく、何となくつゝ、ましく、恥ぢかはしくて、帯のあたりのみ見やりて、顔など見あふこともせず、しばし打萎れて、ひたすらばなおしぬぐふはいとせちなり。(關の秋風)

四 人の方へ

人の方へ行きて物語などするも、心得ありたきことなり。主人の名残惜しかるべき程に歸るこそよけれ。

主人よそみしつゝ、日はいと短し。この頃はいと事多し。はや

日も暮れなん。夜もいまだ長からず。またしはぶきして、「この頃は風寒に感ずる病おほくあり、いとおそろし。」日影を見つゝ、鐘數へなんどして、「さぞ事多からんが、よくぞ語り給ふ。酒すゝめたけれど、この外塵事しげく、人もなければ、本意うしなひ侍るなり」とやうのこと言ひ出でたらんには、疾く歸るべし。(關の秋風)

五 夕立と雪

夕立と雪とは、ことに心の外なる物なり。今日は雲出でたり。

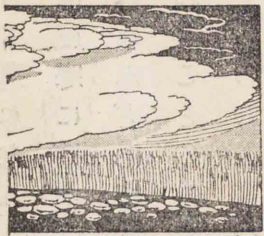
苗おき立つかなと思ふに、月のさし出づる頃は雲もなし。「この頃の寒さはたゞにやはある」といふほど、薄墨の雲絶間なう閉ぢたれば、朝戸出たのもしくて起きつるに、朝日かゞやきて、ほいうしなふたゞいづれともなく、人のかり行きてんと出づる頃、夕立にあひてぬれたり。明日は若菜つみにと思ひて、曉の頃はやへ行きしに、月の影かと思ふばかりに降りつみたり。なるふりてのち空う

ち眺めて、空や近きなどいひあふも、心のほかなればこそ。
 いかづちきらふものは、疾くより知るといふめれど、夕つかた鳴
 りはためきて後に、さればこそ今朝より心地あしかりけれ」とはい
 へど、いかづちとは知らざりけらし。さるに、今年に雪深からん、雨
 すくなからんなど、空より消息こしやうにいふはあさまし。

(關の秋風)

六 我等の青春

福田正夫

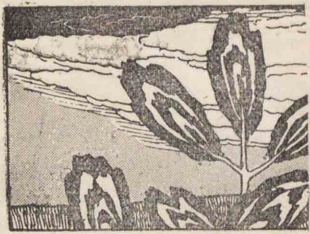


を凌ぎ来た樹のごとく
 わが心あはしく大地に立つ

樹より緑よ花の野よ



光は空にちがれ
 風ほがらかな四月
 喜びはそらから湧き出て
 空に浮く白い雲とたも
 立ちよ近、——
 我等は若く鮮やかな樹とたも
 光の天空を目ざりて
 伸びて行く大樹とたも
 く——み悩む大地の
 高く輝く天空へ



見よ我等の青春は
大地に根を張って
希望のゆくへに出發すのだ

七 八雲先生

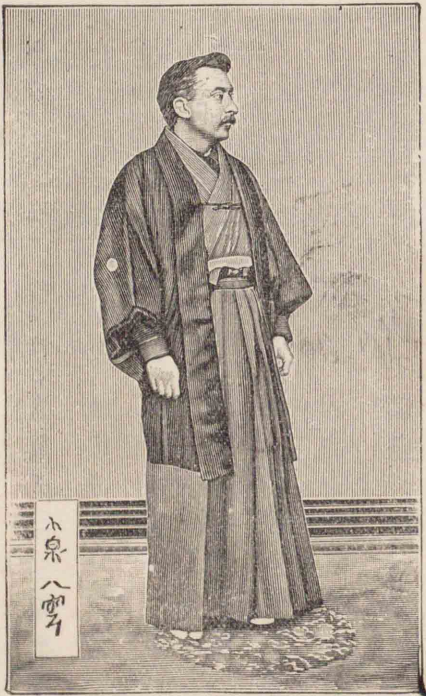
厨川 白村

贈從四位小泉八雲とかう書けば知らない人は日本人かと思ふだらうが、小泉先生の血管には、日本人の血は一滴も流れてゐなかつた。美しい神祕と空想との世界に生きるケルト民族のアイランド人を父とし、昔歐洲の花やかな藝術と文明とを生みだしたギリシヤ人を母とした、純粹なる西洋人であつた。アイルランドに育ち、フランスに學び、米國に人となつて、四海に



厨川白村
名は辰夫
英文學者
文學博士
大正十一年
大學教授
四年
四十四年

小泉八雲とそ
の署名



小泉八雲

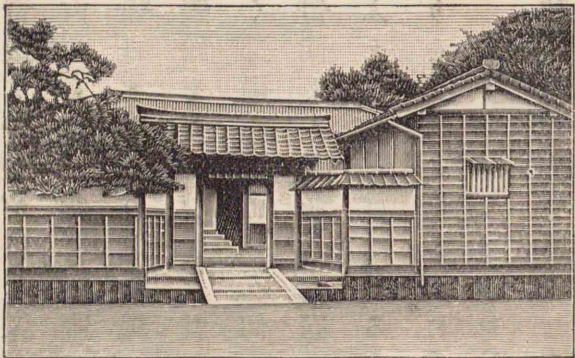
家なき飄零の孤客であつた先生は、東海の果にありと傳ふる蓬萊の國に憧れて、今から三十年程前、始めて我が日本の國土に來られたのである。それは、ある新聞社の一通信員としてであつた。後、出雲に居られた時、歸化して小泉八雲と名乗られた。近代英文學史上に於ける散文の巨擘として、歐米の文壇には、先生のラフカヂオ・ハーソンといふ本名の方が轟き渡つてゐる。多少讀書の趣味を解し、或は苟も日本の現在を知れる英米人にして、先生の名を知らないものは殆ど無からう。日本を今日の如く西洋諸國に名高くしたのは、必ずしも數次の

○
戦勝と國運の隆昌とのみではあるまい。これには先生の絢爛婉美の麗筆が與つて力ある事を思はねばならぬ。見よ、唯觀光を目的として來朝する英米人の十中八九までは、先生の著書の愛讀者である。或は少なくとも其の一二を、必ず行李の底に納めてゐる人たちである。

朝廷が國家に對する功績を嘉せられて、故人に贈位の沙汰があつたとき、たとへ歸化したとは云へ、純然たる白人をこれに加へさせられたことは、未だ曾てわが國の史上に類例なき聖代の慶事であつた。

先生は、如何にも風采の揚らない人であつた。瘦身矮軀、實に白人には珍しいほど小柄の人であつた。いつも前かゞみに背を圓くして、ひよこ〜と歩いて居られた。兩眼殆ど視力なく、左は盲目、右は眼球が大きく飛び出して、それがまた強度の近眼であつた。

小泉八雲舊宅



時々、極めて稀に、衣囊から片眼鏡を出して、ちよつと右の眼に當てられる。その稀世の名文に寫された日本の文物・人情・社會等の精透なる觀察は、すべてこの弱眼に片眼鏡を當てられる、僅か十秒二十秒間の凝視の結果であつたのだ。大きな眼玉をぎよるつかせてゐながら、心の盲ひた凡俗には、とても見えない或物を、先生はかうして、常に鋭くまた敏く觀破せられたのであつた。帝國大學の講師として、先生は年々歳々新しい題目で、新しい講義をせられた。固より準備にも相當に骨を折られた事であらうが、美しい、そしてよく整つて明快な講義の文章は、皆即座に、即興的に、先生の口から出たものである。學生

に書取らせるやうに、考へながらゆつくりと併し少しのよどみもなく語られた。時々は即興の散文詩ともいひたい美しい文句や、奇抜な警句が口を突いて出るのであつた。「咳唾これ詩といへば古からう。」 錦心繡腸、これを織りなせる五彩絢爛の絲をほごして、繰れども繰れども縷々として盡きざる趣は、實に鮮かであつた。銀鈴を振るとき其の聲は、また其の文の美しきがごとくに美しく、抑揚高低にさへ何の不自然もなかつた。斷續しつつ、一言又一句、皆よく聽者の胸底に、詩の靈興を傳ふるに足るものがあつた。ふと目を舉げて見ると、先生は大抵窓外を眺めながら、講壇のあたりをあちこちと靜に歩いて居られた。

天才といへば、不規則な者のやうに心得てゐる人もあらうが、勤勉努力の人であつた先生は、非常に几帳面で、鐘が鳴ると間もなく、重さうな風呂敷包に、美しい装釘の詩集や文集を幾冊も入れたの

を提げて、あたふたと教室に出て來られる。講壇に上つて一揖し、ごく低い澄みわたつた聲で、「グッドモーニング、セントルメン」といひながら、風呂敷包を解かれるのが常であつた。書物のうち引用すべき箇所には、各、しるしの紙が挿んであつた。時間の終に近くなつて、その日講義すべき部分が終りかける事があつても、先生は必ず鐘の鳴るまで何かしら話された。

講義の間の休憩時間には、ひとりで校庭をぶら／＼と逍遙して居られた。東京の大學には、あの地所がもと前田侯の舊邸であつた時代からの、古い／＼大きな池がある。幾百年の齡を重ねた鬱蒼たる喬木に取巻かれて、淀んだ水は溷濁の色をなして、何時も黒かつた。池の彼方の小山の上には、俗に御殿と稱する集會所の古風な建物がある。先生が最も好まれたのは、即ちこの池畔の逍遙で、例の前かゞみにそのあたりを歩みながら、なた豆の日本煙管や

葉卷を燻らして居られるのが常であつた。近づいて教を乞ひた
い事があつても、私たちは先生の静思を妨げること恐れて、滅多
に側へは行かなかつた。落葉を踏みながら低徊して居られる其
の姿を、遠くから望んで、先生の脳裏を往來してゐる美しい幻想の、
何物であるかを想像して見ることもあつた。

景色を見られても、先生には殆ど視力がなかつたから、常に煙霧
模糊、さながら淡彩一抹の風景畫に對するやうに見えたであらう。
目には見ずして心に見られた其の印象は、遂に全き藝術的表現
を得て、色彩ゆたかなる文字に寫されたのだ。鋭敏なる其の感情
は、却つて此の極めて強い近視眼の爲に幸せられ、部分的なる細微
の點を拂拭し去つて、一幅の全景を心裡に活躍する効果を收め得
られたのである。(小泉先生そのほか)



小泉八雲

本名ラフカ
デオ、ハー
ン
本邦に歸化
した英國人
(明治廿七
年歿、七
十五)

八 松江の曉

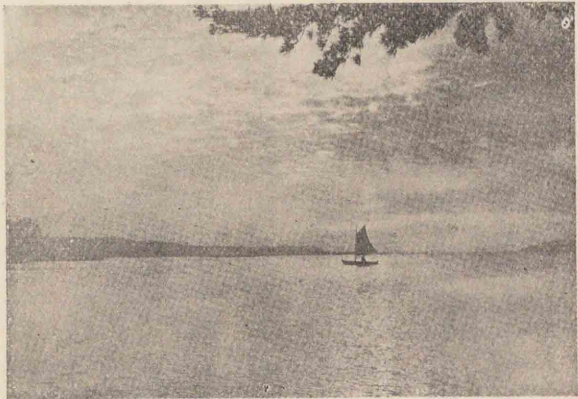
小泉 八雲

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな
大きな脈が搏つやうに響いてくる、米搗の音である。杵の落ちる
響が、一定の拍子で洩れてくるのが、日本の日常生活に伴なふあら
ゆる音響の中で、最も哀に思はれる。米搗の音は、日本といふ國土
の脈搏である。

それから禪刹洞光寺の大きい鐘が「ごうん」と響いて、市街の空を
揺がせる。續いて、私の家に近い材木町の地藏堂から、太鼓の淋し
げな音が、晨の勤行を告げる。最後は行商人の物賣の聲、「大根やい。
「蕪菁や蕪菁。」「薪や薪。」

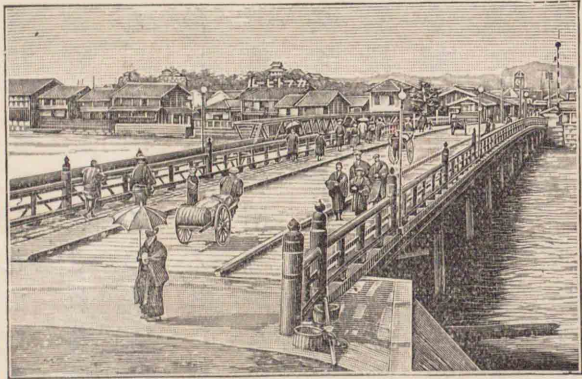
明方のこんな物音におこされて、私は二階の障子を開けて、河畔
の底から伸びた春の若葉の軟かな緑の雲ごしに、朝景色を眺めや

宍道湖



つた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方でわななくやうに萬象を映寫して、微かに光つてゐる。此の川は宍道湖にむかつて口を開き、湖は右手へ擴がつて、杳然たる連丘に包まれてゐる。對岸の家屋は戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙に見渡すと、薄色の霞が、湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲狀をした長い帯は、日本の昔の畫で見るとほりであるが、實際の現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横

松江大橋



に延びて居る。だから、湖水は實際より遙に大きく、味爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霞の中にうかぶ島嶼で、夢の様な一帯の丘陵は、はてしのない土手道かと怪しまれる。そして霞が立つに連れて、その趣はおもむろに變つて行く。朝日の黄色の縁が見えてくると、いままでのよりは更に弱い、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の爲に、蒸氣の立つ黄金色へとかはる。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆

を揚げようとしてゐる。こんな奇怪な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精霊である。しかしこの精霊は、雲と同様光線を受けて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭さきの川端から、手を拍つ音がおこる。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。めい／＼帯に小さい青手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある軽い優美なそして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早

拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が、今みな朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。

「いとも貴き日の造主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふことを謝し奉る。」言葉はこのとほりでないまでも、これが無數の人々の衷心である。

朝日にむかつてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大神社へむかつて、さうするのである。顔を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山的高峰を眺めて、盲人の眼を開かせ給ふといふ薬師如來の大伽藍のある處にむかひ、今度は佛教の儀式に従ひ、掌をあはせて軽く擦るものもある。しかし、日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も／＼古風な神道の祈の文句を唱へる。「拂ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゑみため。」

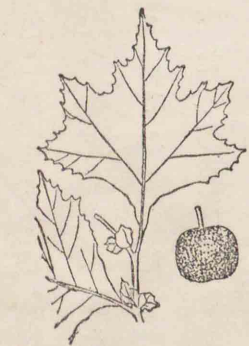
手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始まり出し、橋の上にはからころといふ下駄の音が、だん／＼高く響いてくる。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先であるいて行く。朝日の射した橋の上を通る、敷へきれぬ人の足がち／＼するの、驚くべき光景である。この足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、希臘の古甕に描いた人物の足のやうに、輕やかである。一足の下駄の上に立つだけでも、慣れぬ者には困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄をはいて、全速力を出して駈けて行く。それでも躓きもせず、又下駄もぬげない。更に珍しいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の標本かと思はれる。しかしそれをはいた人は、まるで足に何もつけてゐな

いかのやうに、樂々と潤歩する。

やがて、學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の着物の潤い袖が波動するのは、大きい蝶の羽搏きを見るやうである。親船は白色や黄色の大きな翼を擴げ、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸汽船は、煙突から煙を吐き始める。(日本瞥見録)

九 巴里の新樹

吉江 孤雁



今パリ―全市を埋め始めた若葉の美しさを申しませう。これは全く豫想外でした。けれど、それ等の芽をふき出すのにも、樹々に従つておのづと遅速があるのです。大路の兩側に立並んでゐる樹々の中で、第一に若芽を催すのはシカモロルの樹です。無花果の葉に似た葉先が、黄金

色にたゞまつてゐるのを、どの樹よりもさきに、臆病さうに、まだ冷たい空気の中へ頭をあげはじめます。殆ど幾日も同じ状態をつづけてゐるのだと思つてゐると、一夜蒸すやうな暖氣が襲來して來たその翌日は、それらの葉がみな勢づいて、一樣に薄茶色の外包を破りすてて、碧玉のやうな芽をひろげます。全く新しい目覺を感じます。

次には、これによく似たマロニエの若葉です。日本の橡の樹のやうなものです。この葉の美しさは、まつたく喩へやうがない。二三日の暖氣で、忽ち芽がふきひろがつて、重さうに重なり合つた間から、日光をすべらして居ます。そして、東京のやうな恐しい砂塵を浴びる懸念がないので、おづくしながらも、安んじてその薄緑の手をひろ

マロニエ



マロニエ

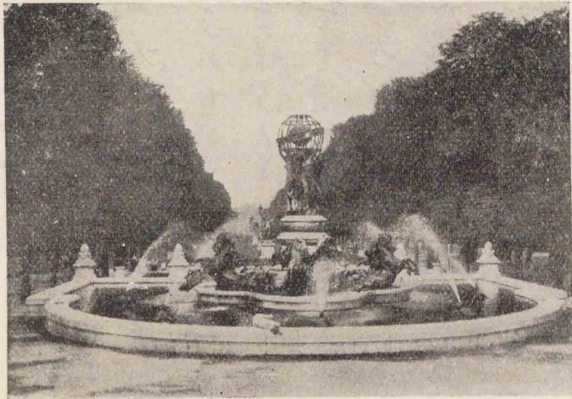
九巴里の新樹

げてゐます。公園でも並樹の間でも、最も茂つた青葉を見ると、すぐそれがマロニエの若葉であることがわかります。

フィヤアジュ(叢葉)といふ言葉は、實際この樹の若葉の爲につくられたのではないかと思はれる。鈴掛鳩がこの葉の茂みに隠れて、ほうくと鳴いてゐるけれど、姿は見られない。日光が直射しても、根もとはいつとも一團の黒い圓を描いて、その亂れることはめつたにない。淡青の葉の光と黄金色の光線とは、決してそれを裏切るもののない心易さで、かぐはしい五月の大氣の中に浸つてゐます。

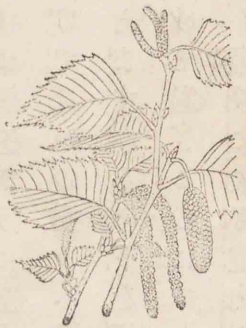
花を愛さないで、若葉の蔭を好んで集まるパリイ人等には、春のあわたゞしい轉瞬の悲哀は感ぜられないで、初夏の軽やかな希望が人の瞳を輝かせます。そしてこの木蔭へは、純粹のパリイ人以外に、様々な人があつまつて來るのです。頭髮の黒い、顔の色もあ

巴里公園



まり白くないスペインの少女も、水淺黄の軍服を着せられて、眞黒な顔を恥かしさうにして、白眼を見せ唇を尖らせて歩くアフリカ植民兵も、金髪のアメリカ婦人も、カーキ色の軍服にいつもきまつて杖を持つて歩くイギリスの士官も、嶮相な顔をしたイタリヤ人も、脊のひくいエジプト人も、脊を曲げ首を前へ突出した支那人も、皆來ては黙つて木の下へ腰をおろし、考へ深さうにしてゐます。時ときこえる鵲鴿の鳴聲と、子供等が投合つてゐる球の地を轉ぶ音とのほかには、何の響もない。若葉の森には、人を落ちつかせる力があると見える。常はおしやべりのパリーの女性達も、こゝへ來て

ブウロウ



は黙つて刺繡の手を働かせてゐるか、大空の中へ泳ぐやうに手を動かして、子供の搖籃を見つめてゐるかです。葉が少し伸びると、直ぐその葉の茂みの上に、乳白なマロニエの花が、ちやうどクリスマスツリーの飾樹へ立て連ねた蠟燭のやうに、咲出します。房々として豊かな葉のうてな^に立て連ねたこの花の蠟燭は、見える限の大路の兩側を飾つてゐます。全く豊富な緑の裝飾です。街頭の柳の砂塵をあびて、行人の隣をひく姿などは、こゝにはさらに見られません。この樹について若葉するのは、セエヌ河の兩岸などに立並んでゐるブウロウの樹です。これは樺のやうな樹です。その細い尖つた葉が伸びはじめるとともに、絲のやうな青黄色の花が、葉と紛れさうに咲出します。その木の葉は、マロニエの

葉のやうに肉厚で、しつとり落着いてゐるのではなく、いかにも輕げに、敏感さうに、空中に躍つてゐます。あらゆる空中の動搖をうけて、ほかの樹々へ警告を與へるのが、この木の葉の役目らしく見えます。その下を通る小蒸汽のたてる笛の響にでも、燕が一羽掠めて過ぎるのにでも、すぐそれをうけて全體が動搖します。

最後に、最も臆病らしく、暖氣を見定めて芽を伸ばすのがプラタ



プラタマ

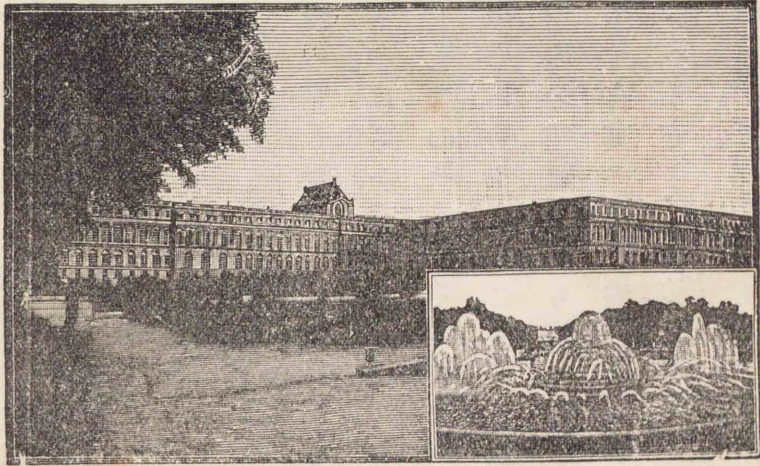
アヌ、即ち鈴懸の樹です。用心深いこの木は、若芽が伸びはじめると、茶褐色をした毬毛をつけた、小さな三角形に尖つた實を、セエヌの河上から大路の上へかけて、一面に飛ばせます。彼等の盲目的な領土擴張

の運動が、今しばらく續くのです。柳絮が、春風に吹かれて飛ぶやうです。淡青いゆるやかなセエヌの波の上へ、褐色の縞を疊み、路

の兩側へ吹寄せられて、歩道の境目の石の蔭へ身をひそませ、それが人の足音のするたびに、慌てて頭を上げて、ふらりと先へ走つて行くのです。雀はそれ等の毬毛を見つけて、喜んで新しい巢の營に運んで行きます。

しかし、もうこれらの樹の葉は大分出つくして、パリーの全市は緑の空と變つてしまひました。そして夕方のにほやかな、いかにもやはらかな大空の中から、新月の影が青葉の上へ懐しい光をおとしてゐます。そしてなれば以上暗黒で、人どほりも少ない戦時中のパリーの夜にも、人を誘ひ出す力は十分にこもつてゐます。室内の空氣よりも、戶外路上の空氣の方が遙にやはらかで、河に沿うて青葉の木下道を通つて行けば、どこまでいつてもはてしがないうやうです。(若き自然)

近衛文麿
公爵
講和全權委
員隨員



ヴェルサイユ
宮殿

一〇 平和成る

近衛文麿

六月二十八日、朝來暖煙軽く揚りて、曉風爽かなり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組となき行列「ビープ、ラ、フランス」を唱へて、旗を振りつゝ、市中を練歩き、自動車の如きも亦思ひくゝに装を凝らしたり。思へば過去五箇年の間、砲彈の音に、敵機の襲來に、心膽を寒からしめし事、幾度ぞ。今や乾坤一轉して、藹然たる瑞氣の搖曳するを

ヴェルサイユ宮
ルイ十四世の建築

見る。巴里人の今日の喜や、實に想察するに餘ありといふべし。

この日ヴェルサイユ宮附近の混雜は、名狀すべからざるものありしが、宮殿正門前の大通は、幕目正しく掃き清められて、一切の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めず。 兩側に堵列せる共和衛兵の銀色の兜と、白き鹿革の袴下と、黒く光れる長靴とは、光彩陸離として、莊重なるこの日の儀式を、いやが上にも莊重ならしめたり。

午後三時、各國全權委員は皆已に入場し、招待をうけたる人々及び新聞記者等も、亦處狭きまでに詰込みて、さしにも廣き鏡の間も、いさゝかの餘地だになかりしが、今は近世の歴史に最も光輝ある儀式を前に控ふる事として、流石に咳一つ聞えず、

満場静まり返れり。
見渡せば、庭園に面して置かれたる長き卓子の中央には、クレマンソー氏例の如く椅子



西園寺公
クレマンソ
當時の佛國
首相

ウイルソン
當時の米國
大統領



ウイルソン

ロイド・ジョージ



クレマンソー



に深く腰をおろし、むかつて左にはウイルソン大統領を始として米國委員次に伊太利委員次に白耳義委員あり。またク氏のむかつて右にはロイドジョージ氏を始として英本國委員次に英植民地委員次に我が日本の委員西園寺公爵を始め順次に居流れたり。何れも黒のフロックコート姿にて、華麗眼をそばだたしむる物とては一も見あたらざりき。更に眼を轉じて窓外を望めば、正面の有名な噴水池の周圍には、共和衛兵圓陣をなして整列し、その背後には、特に今日に限り庭園まで入るを許されたる幾千の人々堵の如く並び、調印の終るを今や遅しと待構へたり。

午後三時を過ぐるこゝと五分、向側の扉は開かれて、滿場の視線一時にその方に注がるゝや、やがて二名の獨逸委員は、幾多の佛國將校に見守られつゝ、入場しきたれり。先なるは新外相ミユラー氏にして、後につゞけるはベル氏なり。何れもフロックコートを着し、稍俯向きがちに極めて物靜かなる態を粧ひつゝ、日本委員の隣なるさだめの席につけり。席定まるや、クレマンソー氏は徐に起ちて、先づ獨逸委員より調印すべき旨を告ぐ。こゝに於て獨逸委員等は、やをら起ち上り、案内せらるゝ儘に、クレマンソー氏の直前、條約の正文を置かれたる卓子の前まで歩を運べり。

彼等は平靜にして、殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以て前に進み、代るゝ條約の正文に署名したり。その間僅に二三分時のみ。嗚呼、幾百萬の人命と幾千億の財貨とを犠牲として、漸く贏ち得たる最後の結果は、かくの如きか。獨逸の運命はかく

他人、國家、姓名
クはめは自らの
財産を投じて
を盡すこと

ウイリアム老帝

モルトケ

倒置法(倒置顛倒)

ウイリアム老帝

獨逸の英主

(西紀一八七〇)

ビスマルク

獨逸の大政治家

(西紀一八五〇)

モルトケ

獨逸の名將

(西紀一八〇七)



Signature of Emperor William I

してさ
だまり
了んぬ
見よ、自
席に歸
り行く



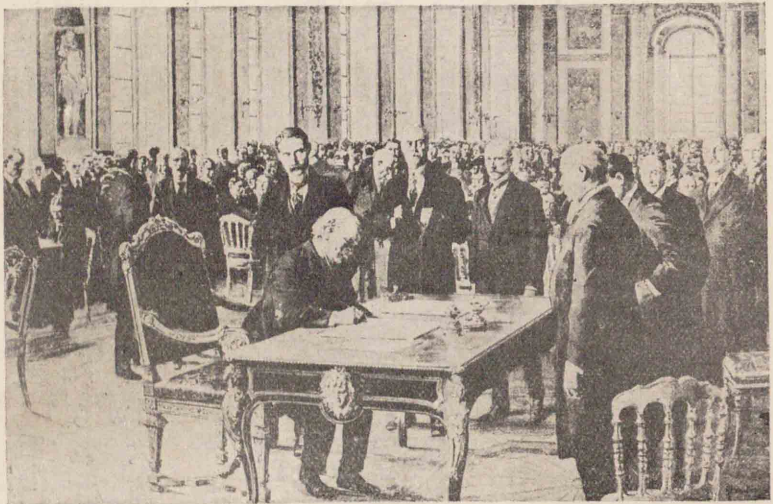
二人の黒き姿の淋しくも憐なるを。これを彼の五十年の昔同じ



Signature of Otto von Bismarck

この大廣間に於て、ウイリアム老帝がビスマルク・モルトケをはじめ雲の如き賢臣名將に圍まれつゝ、威風堂々として四邊を壓倒したりし當

鏡の間調印の光景



時と對比しきたらば、何人か心中無限の感慨に打たれざるものあらん。

獨逸委員の座に復するや、ウイ
ルソン氏先づ座を立ち、つゞいて
四名の米國委員これに従ひ、同じ
卓子に至りて署名せり。次には
ロイドジョージ氏を先登として
英本國委員次に英植民地委員、次
に佛國委員次に伊太利委員、次に
日本委員の順序にて、各一團づつ
代るゝ、その卓子に於て署名し、
かくて最後のウルグアイ委員に

いたるまで時を費すこと四十三分、調印を了したる國々は、山東問題に關する要求の容れられざりしを理由として、これに加はらざりし支那を除き、凡て二十六箇國、調印の全く終りしは午後三時四十九分なり。

こゝに於てクレマンソー氏肅然として起立し、莊重に、しかも簡單に宣言して曰く、「平和は今や成れり」と。この時世界に類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一齊に迸出で、殷々たる百一發の祝砲は、宮殿の内外に蝟集せる幾十萬の人々の歡呼の聲と相應じて、新なる世界の出現を祝しぬ。(戰後歐米見聞録)

一一 内の聲

高村光太郎

高村光太郎
彫刻家
詩人

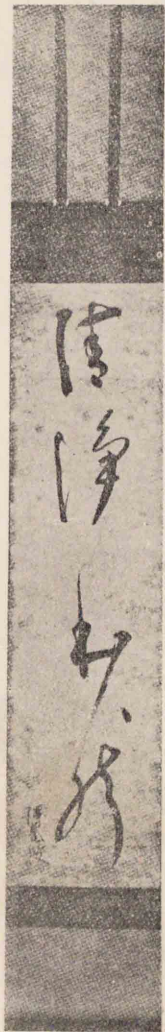
若いのはいゝ。何かが知りたくて知りたくて、また遊びたくて遊びたくて、疲れるといふことが疲勞でなくて休息であるほど、若

いのはいゝ。若い人のみづゝしさは、いろゝゝな意味でこの世を救ふ。

だが、恐らく若さの美德を若い人に説くほど、變なものはあるまい。若さの眞中にゐるとき、若さの價を聽かされるほどをかしたものはあるまい。あまりあたりまへ過ぎることを聞く氣がして、何の不思議も感ずまい。あゝ、かういふ無自覺はほんたうに貴い、力強い。

若さの美德を痛感するのは、若い人のことではない。やがて、ひとりでにそれを感じる時代がくるのだ。若さのよいのは、若さを持つ時ばかりでなく、若さをしのぶ時でさへよいのである。若さを自知せぬ若い人よ。君たちの體力の續くかぎり、精神力の續くかぎり、自分の内からの疾しくない欲望の聲に忠實であるが、いゝ。何が疾しいか、疾しくないかに、外からの標準はない。自然は人間

の心に、自らそれを感じさせる仕掛を作つて置いた。一番よく自分の内の聲を聴く者が、一番正しい生活に入ることになる。人間世界の道徳律は、さうやつて自然に出来たものだと思ふ。若い人が「浄さ」に敏感であるのは、人間本能のいかに信頼すべきかを説明してゐるのだ。若い人よ。君たちのその敏感さを守るがい。



清浄本然
(澤庵禪師筆)

力を盡くして清浄に進むがい。この世は清浄ばかりの世ではない。寧ろ、その反対のものが充滿してゐるにはあるが、しかも常に清浄であることを望んでゐるのだ。それが、自然の植ゑた本能である。

自分の浄さを守ると同時に、人の浄さをも守るがよい。汚れた

リンカーン像



LINCOLN

ものは恕せ。自分の過を知つたら、心から自然にあやまるがい。そしてあとは忘れるがい。若い人よ。みづ／＼しい氣力に満ちた人よ。君たちは心おきなく勉強するがい、遊ぶがい。君たちが必ず自然から獨特の特質を興へられてゐることを信ずるがい。君が君の良心に従へば、この世ではきつと戦はねばならぬことに出會ふだらう。その時、君の後楯に自然がついてゐることを思ひ出すがい。勝敗は、君が自分の内の聲に聴いたか聴かぬかにある。相手を倒したか倒さぬかにはない。

立身出世教や成功熱は、人間の本能である進展意志を悪用したもので、これに惑はされると、魂を傷つけられて了ふ。立身出世の代表者のやうにされてゐる

あのリンカーンの美しい心事を考へて見ても、いかに立身出世教のはづかしいものであるかがわかる。立身出世したリンカーンは、決してそんな教を奉じたのではない。

若い人よ。十分に腕を伸ばして、太陽を浴びて歩き給へ。悩む時には悩まねばならぬ。悩んでなほかつ明朗でゐられる、永遠に若い魂となるには、若い時の精神的鍛錬が肝要である。

二二 阿新丸

このたび君の御企を申し勸めけるは源中納言具行右小辨俊基日野中納言資朝なり。各死罪に行はるべしと評定一途にさだまりて、まづ先年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、其の國の守護本間山城入道に下知せらる。

この事京都にきこえければ、資朝の子息國光の中納言、その頃は

具行 源氏の子
俊基 藤原氏の子
資朝 藤原氏の子
俊光の子
先年 正中二年

阿新殿とて、歳十三におはしけるが、父の卿囚人に成り給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られるが、父誅せられ給ふべきよしを聞き、今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて、冥途の旅の御供をもし、又最期の御有様をも見奉るべしとて、母に御暇をぞこはれける。

母御しきりに諫めて、佐渡とやらんは、人も通はぬ怖しき島とこそきこゆれ。日敷を経る道なれば、いかんとしてか下るべき。その上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えずと、泣き悲みて止めければ、よしや伴なひ行く人なくば、如何なる淵瀨にも身を投げて死なん」と申しける間、母いたくとぞめば、又目の前に憂き別もありぬべしと思ひわびて、力なく、今まで唯一人附副ひたる中間を相添へられて、遙々と佐渡國へぞ下しける。路遠けれども、乗るべき馬もなければ、はきも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露

わけわぶる越路の旅思ひやるこそ哀なれ。

都を出でて十日餘と申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。是より商人船に乗りて、ほどなく佐渡國へぞつきにける。人してかうといふべき便もなければ、自ら本間が館にいたりて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立ち出でて、此の内への御用にて御立ち候ふか。又如何なる用にて候ふぞと問ひければ、阿新殿、是は日野中納言の一子にて候ふが、近頃斬られさせ給ふべしと承りて、其の最期の様をも見候はんために、都より遙々と尋ね下りて候と、いひもあへず涙をはらくと流しければ、此の僧心ありける人なりければ、急ぎ此の由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがに哀とや思ひけん、懸て此の僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、踏皮行纏解かせ、足洗ひて、疎かならぬ體にてぞ置きたりける。阿新殿是をうれしと思ふにつけても、同じくは、父の卿を疾く見

奉らばやといひけれども、今日明日斬らるべき人に、是を見せては、なか／＼よみ路の障ともなりぬべし。又關東のきこえも如何あらんずらん」とて、父子の對面を許さず。四五町隔てたる處に置きたれば、父の卿は是を聞きて、行末も知らぬ都に、いかゞあらんと思ひやるよりも尙悲し。子は其の方を見やりて、浪路遙に隔たりし鄙の住居を思ひやりて、心苦しくおもひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。是こそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたる處に、堀ほり廻らし塀塗りて、行き通ふ人も稀なり。なさけなの本間が心や。父は禁籠せられ、子はいまだをさなし。縦へ一所に置きたりとも、何程のおそれかあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、なからん後の苔の下、思寢に見ん夢ならでは、相見ん事もありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそ哀なれ。

五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢よりいだし奉りて、遙に御湯も召され候はぬに、御行水候へ」と申せば、早斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、嗚呼うたてしき事かな。我が最期の様を見んために、遙々と尋ね下りたる幼き者を、一目も見ずして果てぬる事よとばかり宣ひて、其の後は、曾て諸事につけて言葉をもいだし給はず。今朝までは氣色萎れて、常には涙を押拭ひたまひけるが、人間の事においては、頭燃を拂ふ如くになりぬ」と覺りて、唯顯密の工夫の外は、餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乗せ奉り、爰より十町ばかりある河原へいだし奉り、輿昇きするたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頌を書き給ふ。

五蘊假成形

四大今歸空

將首當白刃

截斷一陣風

年號月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體は尙坐せるが如し。此の程、常に法談などし給ひける僧きたりて、葬禮形の如く取營み、空しき骨を拾ひて、阿新に奉りければ、阿新是を一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、かはれる白骨を見る事よ」と泣き悲しむも理なり。

阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をば召仕ひける中間に持たせて、まづ我よりさきに高野山に参りて、奥の院とかやに納めよ」とて、都へ歸し上せ、我が身はいたはる事あるよしにて、尙本間が館にぞ留まりける。是は本間が情なく、父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日経ける程に、阿新晝は病の由にて終日に臥し、夜は忍びやかにぬけ出でて、本間が寢所など細々に伺ひて、隙あらば彼の入道

父子が間に、一人さし殺して、腹切らんずるものと思ひ定めてぞ狙ひける。

或夜、雨風烈しく吹きて、番する郎等どもも、皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つ處の幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて伺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢處を替へて、いづくにありとも見えず。又二間なる處に燈の影の見えけるを、是は若し本間入道が子息にてやあるらん。それなりとも討ちて恨を散せんと、脱け入りて是を見るに、それさへ爰にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ、唯一人臥したりける。よしや是も、時にとりては親の敵なり。山城入道に劣るまじと思ひて、走りかゝらんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、唯、人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊にあきらかなれば、立寄りば、聽て驚き合ふ事もやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず。如何せんと案じ煩ひ

阿新敵を鏡ふ
齋藤松洲筆

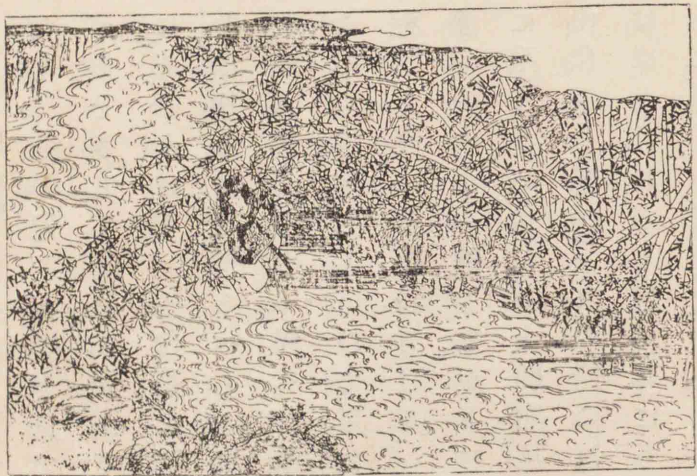


て立ちたるに、折節夏の事なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲のあまた明障子に取りつきたるを、すはや究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引明けたれば、此の蟲あまた内へ入りて、聽て燈をうちけしぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りして探るに、太刀も刀も枕元にありて、主はいたく寢入りたり。先づ刀を取りて腰にさし、太刀を抜きて胸元に指當てて、寢たる者は死人に同じければ、驚かさんと思ひて、先づ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く處を、一の太刀に臍の上を疊までつとつきとほし返す太刀に喉笛さし切りて、心閑に後の竹原の中へぞかくれける。本間三郎が一の太刀にて胸を通されて、「あつ」といふ聲に

番衆ども驚き騒ぎて、火をともして是を見るに、血のつきたる小さき足跡あり。「さては阿新殿のしわざなり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。」探しいだして打殺せ」とて、手にく松明をともし、木の下草の蔭まで、残る處なくぞさがしける。

阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき。人手にかゝらんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今はいかにもして命を全うして、君の御用にもたち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣孝子の義にてもあらんずれ。もしや一まづ落ちて見ばやと思返して、堀を飛越えんとしけるが、~~中~~二丈深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべき様もなかりけり。さらば、是を橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へ、さらくと登りたれば、竹の末堀の向ひへ靡伏して、やすやすと堀をば越えてけり。夜は未だふかし。湊の方へ行き、船に

阿新堀を越ゆ
(太平記圖會)



乗りてこそ陸へは着がめと思ひて、たどるく浦の方へ行く程に、夜もはや次第に明け離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隠さんとして日にくらし、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れ居たれば、追手どもとおぼしき者ども百四五十騎馳散りて、もし十二三ばかりなる兒や通りつると、道に行合ふ人ごとに問ふ音してぞ過ぎ行きける。

阿新、其の日は麻の中にて日をおくらし、夜になれば湊へと志して、そことも知らず行く程に、孝行の志に感

じて、佛神擁護の眸をや廻らされけん、年老いたる山伏一人行合ひたり。此の兒の有様を見て、痛はしくや思ひけん、是は何處よりいづくをさして御渡り候ふぞ」と問ひければ、阿新事の様をありの儘にぞ語りける。山伏是を聞きて、我此の人を助けずば、唯今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乗せ奉りて、越後越中の方まで送りつけまゐらすべし」といひて、足たゆめば、此の兒を肩に乗せ、背に負ひて、程なく湊にぞ行着きける。夜明けて、便船やある」と尋ねけるに、折節湊の中に一艘もなかりけり。如何せんと求むる處に、遙かの沖に乗りうかべたる大船、順風になりぬと悦びて、櫓を立て、篷をまく。山伏手を舉げて、其の船これへ寄せてたび給へ。便船申さん」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞き入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外に漕ぎいだす。

山伏大に腹を立て、柿の衣の露を結んで肩にかけ、沖行く船に立向ひて、いらたか數珠をさら〜と押揉みて、明王の本誓あやまらずば、權現、金剛童子、天龍、夜叉、八大龍王、其の船此方へ漕返して、たばせたまへ」と、跳りあがり〜、肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やしたまひけん、沖の方より俄に悪風吹ききたりて、此の船忽ち覆らんとしける間、舟人どもあわてて、山伏の御坊、先づ我等を御助け候へ」と、手を合はせ、膝をかゞめ、手に〜、船を漕ぎもどす。汀近くなりければ、船頭船より飛下りて、兒を肩にのせ、山伏の手を引きて、屋形の内に入りたれば、風は又もとの如くに直りて、船は湊を出でにけり。

其の後、追手ども百四五十騎馳せきたり、遠淺に馬をひかへて、あの船とまれ」と招けども、船人は是を見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船は其の日の暮程に、越後の府にぞ着きにける。阿新、山伏に

たすけられて、鰐の口の死を遁れしも、明王加護の御誓、揭焉けつゐんなりけるしるしなり。(太平記)

一三 人の香

竹 趣 三 又

昨日、某倶楽部にて、一場の談話を求められ候ひしまゝ、人の香といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらんとをのぞみ候ひき。今茲に少年諸君の爲に、更にこの趣旨を開陳致すべく候。

山野に花卉少なからずと雖も、香芬あるものは多からず。しかも香芬あるものは、叢澤の中にありと雖も、人のために認めらるべく候。これと同じく、人も亦香氣あるものとならんことを願はしく候へ。人の香氣とは、その才智藝能に伴なひて、これをはたらかすところの崇高なる精神を申すに

て候。苟もこれあらんか、その事業の大小を問はず、必ず生命あり、香氣ありて、人を動かし人を感ぜしめ、人に認めらるべく候。

さて、人の香氣は何よりきたるかと申し候ふに、自敬の念よりきたるものに候。自敬とは、みづから尊大に構ふる譯にてはこれなく、自己が自己に對して敬意を表すること候。この身惜しむべしと思ふ一念に候。眇たるこの身も、天地の精靈を宿したる一塊なれば、大いに發しなば、如何なる働を爲さんとも知るべからず候。然るに、目前の劣等なる慾情に追はれて、尊からぬ所業を爲さんは、はづかしき限に候。「君子は獨行、影に恥ぢず」と申すも、君子は惡木の蔭に宿らず」と申すも、みな同じ意義にて、おのれを敬ふ念より出でたる

君子は獨行
宗史蔡元定
傳にある語
君子は惡木
管子の語

語に候。

昔、アレクサンドル大王に對して、敵軍に夜討をかけんと申し出でたる者ありける時、大王これを却けて、朕は勝利を盗まずと申され候ひき。又、日野阿新丸が父の仇を討ちける時、まづその枕を蹴つて、目をさまさしめて後これを撃ち候ひき。古今戦勝の將軍、復仇の子少なからざる中に、是等の人のみ多く語り傳へらるゝは、何故なるかといふに、その所業に精神あり、香氣あるが爲に外ならず候。近來、我は如何にして富を作れるかといふが如き、俗惡成功談の傳へらるるが爲、少年を誤ること少なからず候。小生は、少年諸君が唯その才智藝能によりて、一時體裁よくくらすといふやうなる投機談に迷はず、精神あり香氣ある生活を營まんことを

を希望致し候。香氣あるところ、人必ずこれを認むべし。失意落膽は無用に候。

以上は平凡の語ながら、小生が平常家兒輩に語りをるものに候へば、無難にして間違なきことだけは確信致し候。小生は、少年諸君が、右の香を養はれんことを希望してやまざるものに候。(讀畫樓問話)

一四 學者の苦心

芳賀 矢一

十年一昔といふことを思ふと、上田・松井の二君が國語辭書の編纂に着手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晚餐會に招かれて打興じたのは、つい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで、人の子の母となつて居る。短いやうで長いもので

芳賀矢一
東京帝國大學
文學部教授
（昭和二年
歿）
上田・松井
上田萬年
松井簡治
共に大日本
國語辭典の
著者

ある。今や其の第一巻がいよいよ出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極りがない。この一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易やの進歩發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年では無かつた。二君の編纂事業はかういふ中に徐々と其の工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘出されて、選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬、幾十萬とない古語や新語は、幾百部、幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一

月二月三月四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改る。同じ仕事かはてしなくいつまでも續く。傍から見れば、抄の行かぬことは齒庠はがゆいやうで、何時方かたのつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦は間斷なく此の間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、其の進歩は遅いが其の成果は確實であつた。かくて粒りゅう粒積上げた砂子いさごも、遂には山を成す喩のやうに、編纂の稍、緒に就いたまでには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は、幾隻となく進水式に浮かび出たのであつた。

學者の仕事は地味である。目覺しく世人を驚かすやうなことは無い。二君が拮据ここ十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども、一たび其の室に入つて山成す材料を

見上げるものは、何人と雖も其の難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣を尊敬せずには居られぬ。さうして、それが決して學者の閑事業では無くして、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、随つて國家教育の根底となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とは言はれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に頼らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狭い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて、鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大に増加したのを祝賀する人は、之と同時に、數隻の巡洋艦位で満足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、こゝに一大戰艦にも譬ふ

べき本書を有するに至つた事を驚歎し、嘆美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民に採りての立派な強みになる。此の一大産物が堅忍不拔な二君の手によつて成就せられた事は、友人たる余の言ひ知らぬ喜悅を感ずる所以である。此の十年は國語界に於ても亦無意味な十年では無かつたのである。

學者の事業はいつも世間と没交渉のものでは無い。専心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を一日も餘所に見て居る譯には行かぬ。十年一昔の間には、國語其のものの中にも絶えず變遷が行はれて居る。それに注意するだけでも容易の業では無い、靜寂な編輯室は紛糾した實社會と常に相往來して居

るのである。

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。後世の人は、必ず之を明治時代に企てられて、大正時代に完成せられた大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の満足と喜悅を察知すると同時に、今か今かと十餘年を待暮らした同友とともに、先づ二君の成業を祝して、一大白を浮べようと思ふのである。(大日本國語辭典)

一五 苦行者と蛙

佐藤 春夫



現代の小説家

或處に一人の人間がゐた。彼は、洞穴の口にある石の上に坐つてゐた。何時から彼がそこに居て、どれだけ長い間そのやうにぢつとして居たかを、私は知らない。とにかく、そんな一人の人間が

居た。

或時、その人間の眼の下へ、一疋の蛙が出て來た。蛙の方では、はじめその目の前に坐つて居る人間には、氣が附かなかつた。それ程、その人間はぢつとして居たからである。然し、目の前に坐つて居るのが、生きた人間であつたのを蛙が知つた時、蛙は驚いた。

「そこに、石のやうに坐つて居るのはどなたですか。」

蛙は、その人間を見上げてさういつた。

「私か。私は苦行者だ。」

さう人間が答へた。蛙は、苦行者といふ言葉をよく知らなかつた。そこで、蛙は重ねて聞いた。

「苦行者? さうして、あなたはそんなにぢつと坐つて一體何をなさるのです。」

そこで、苦行者は再び答へた。

「私はちつと坐つてゐる。私は私の眼を、私自身の世界を、幸福にする星の上に置いて、また私は私の心を、私自身の地球の核心に据ゑて、私はかうして、私の宇宙の天體と地球との運行を一心に調節してゐる……。」



苦行者
(會我蛇足筆)

「謎のやうなことはおつしやらずに」と、蛙は苦行者の言葉を遮つた。「どうぞ、無學な蛙にもわかるやうにおつしやつて下さい。要するに、あなたは何の爲にそんな事をなさるのです。」

「一口にいへば」と、苦行者が答へた。「私は不死を求めて居るのだ。人間と永遠とを一つにしようとしてゐるのだ。」
さう聞いて蛙は躍り上つた。

「おゝ！ このお方こそ私の捜してゐた先生だ。噂に聞いたあのお方だ。先生、どうぞ私を先生のお弟子にして下さい。」
それから蛙は持前の雄辯で、彼の身の上と、彼が苦行者の弟子になりたいといふ理由とを説明した。これによると、この蛙はもとイソツプ物語のなかの古沼の蛙の一人であつた。その時、彼の故郷である古沼では、大變な騷動がおこつて居た。その古沼の蛙たちは、彼等自身を統治するに足るやうな強い立派な王様を、彼等自身以外に欲しい」と、神様に御願をしたのが、因で、神様は最初に、王様として木の丸太を下さつたのだ。けれども、もつとく、強い立派な働のある王様をと、蛙たちが重ねて願つた時には、神様は怖しい鱈を、その古沼の王様として授けて下さつた。鱈は位に即くと同時に、手あたり次第に蛙を喰ひ殺しはじめた。そこで、蛙たちの或者は神様を呪ひ、或者は新しい王に對して一揆を企てた。多くの

蛙たちは、その父や母や妻や子を鰐に喰はれた。

「かうして」と、苦行者の前の蛙はいつた。「私は多くの死を見ました。また、我勝に鰐の口から逃れようと争つてゐる同類のあさましさをみました。さうして、私は世の中を悲しいものだと見て取りましたから、ある夜その沼から遁れ出して、水を遡つて遠い旅を續けました。私はその途中で、先生のお尊を承つて、その時からどうかして先生のお弟子になりたいと思つて居たのです。先生、どうぞ私を先生のお弟子にして下さい。」

「とにもかくにも、此處に私と一緒にゐる。」

苦行者は蛙にさう答へた。かくして蛙は苦行者の弟子になつた。蛙は、先生の前に兩手を突いて坐つた。彼等は互にむかひ合つて坐つた。彼等はたゞ黙つてゐた。日の光と月の光とが、上からこもく、彼等を照らした。又、時には、闇が彼等をすつぽりと裏

んだ。さうして、そんな時には、近くの樹の梢に梟が来て啼いた。その度毎に、蛙は怖しさに身慄をした。けれども我慢をして、蛙は黙つてゐた。蛙の身のまはりには苔の美しい花が咲き、それが散り、また咲いて、また散つた。その青い苔は、蛙の體のまわりに擴がつた。蛙の坐つてゐる足もとから盛り上つて來た。とうとう苔は、蛙の體の上にも生えて來た。蛙は苔のために、雨蛙のやうに青くなつた。けれども我慢をして、蛙はぢつとしてゐた。或朝の事であつた。

「先生！」と蛙が叫んだ。「先生、私はもう先生のお弟子は厭になりました。」

そこで苦行者がいふのには、

「それはまたどういふ譯だ。」
すると蛙が答へた。

「私は私の故郷へ歸りたくなつたのです。あの古沼が懐しいのです。私は私共の仲間が、今どうしてゐるかが知りたいのです。友だちが戀しく氣にかゝるのです。それに仲間のあの怖しい騒を打ちすてて、自分一人がこんな處に逃げて來てゐるのが、自分自身ではづかしいのです。私は、今の私が、私の仲間に對して何の仕事をもしてゐなかつた事に、今氣が附いたからです。」

苦行者は聽き終つてさといふには、

「お前はお前の仲間ではない。たゞお前自身だ。」

「それなら先生」と蛙が重ねて反問した。

「私は私自身の爲に、何の仕事をも今してゐるでせう。」

そこで、苦行者が重ねていふには、

「我々は目に見えては何もしない。然し我々は、目には見えない仕事をする。ちやうど、我々の幸福も我々の報酬も、他の人のそ

れ等の物のやうに、目には見えてゐないと同じだ。お前は、お前自身の中にあるお前の仲間を見よ。お前の仲間にあるお前を暫く見るな。又お前自身の中にある世界を見つめよ。世界中にあるお前を暫く忘れよ。惧れるな。只暫くである。さうして結局は同じことである。」

「先生のお言葉はいかにも高遠だ。ちやうど、無いものを捜し出さうとするのにも似てゐる。」

さういひ放つた次の一瞬間に、蛙はもう苦行者の前には居なかつた。何故かといふに、その時蛙は昂然として後の脚で躍り上つたからである。

蛙は石の上から下りると、水の流に沿うて、以前遡つたことのある道を歸つて往つた。さうして永い旅の後に、彼は再び故郷の古沼へ歸り着いた。然し、彼が再び古沼に來た頃には、彼の考は又變

つてゐた。彼はもう一度やはり苦行者の處へ、もとの先生の處へ往かうと思ひ返した。彼は、流を段々と下つて来て古沼を一目見た時に、古沼はそのいゝわるいに關らず、彼の本來の氣質には、決して向かないことに氣付かずには居られなかつたのであらう。さうして、苦行者の教へたやうな物の考方が、その時彼に取つて解り易いものになつて來たのであらう。それとも、もつとはつきりとした理由があつたか、私はそれに就いてはよく知らない。何にせよ、折角遠い處を、故郷の古沼まで歸つて來た蛙が、その同じ遠い路をすぐさま取つて返して、再び苦行者の石の上に來たことは事實である。

苦行者はまだ生きてゐた。生きて、元のとほり石の上に坐つてゐた。その苦行者の目の下に再び來て坐つた時に、蛙はいつた。「先生、私をどうぞもう一度先生のお弟子にして下さい。」

苦行者はもう何もいはなかつた。たゞ無表情な顔で頷いた。かうして、蛙は再び苦行者の前に兩手を突いて坐つた。彼等は、互にむかひ合つて坐つた。彼等はたゞ黙つてゐた。蛙は、ちつと先生の瞳を凝視した。蛙は、それを、彼自身の世界を幸福にする星と信じたからである。日の光と月の光とが、上からこも／＼、彼等を照らした。又、時には、闇が彼等をすつぽりと裏んだ。さうして、そんな時には、近くの樹の下枝に梟が來て啼いた。けれども、蛙はもう身慄はしなかつた。蛙の身のまはりには、苔の美しい花が咲き、それが散り、また咲いて、また散つた。苔はもう花が咲かなくなつて、その古い苔は枯れて、新しい苔が生え變つた。蛙の體の上に、新しく生えた苔にも花が咲いた。それ程長い間、それ程ぢつとして、蛙は坐つてゐたのである。蛙は、もう苔の花の事などは忘れてゐた。といふのは、蛙は先生の瞳をばかり見つめて居たからである。

さうして、彼等のもとよりいつも唯黙つてゐた。然し、或夕方であつた。「先生！」と蛙は叫んだ。

「先生は今どこに行かれるのです。今まで、私が私の星として見つめて居た先生の瞳は、もう見えなくなりました。先生のお姿は今消えて行きます。」

苦行者はたゞ黙つてゐた。

「先生、何とかおつしやつて下さい、私を安心させて下さい。」

その時、或聲があつていつた。その聲は、空を渉るそよ風よりも微かで、長い間おのれの聲をも聞かなかつた蛙の耳にだけ、とぎれとぎれに、然しはつきりと聞くことが出来た。聲はいつた。

「蛙よ、私の弟子よ。安心せよ。今お前は悟る、お前の目から私が消える時に。私の目には、お前はもう疾くに消えてゐる。それ故に、お前自身もまた私が消え去ることを恐れるな。本来影で

ある所の我々は、影の世界に入る時には消え去る。然しその時、我々はどこにでもいつまでもある。ちやうど月の光の照らす光が、どこにでもいつまでもあり、しかもそれは目には見えるけれども、手に掬ふことは出来ず、手に掬ふすべはないけれども確にあるやうに。」

響のない聲がさう語つた。ちやうどその時、深くなり行く夕闇の中に、その爲に光を増した月影は、鬱蒼とした樹々の葉の間から洩れて、その石の上に光が射した。さうして、月は、その石の上には唯苔ばかりがあるを見た。潺湲たる溪流のひびきが、静寂を語つてゐる。(藝術家の喜)

一六 ものの上手

富士谷御杖

大雅堂といひし人、近頃書畫をもて鳴れり。わかかりし時、三絃

富士谷御杖
號は北邊
通稱專右衛
門都の國學
者(文政六年
歿五十六)

大雅堂
 池野氏
 名は無名
 京都の畫家
 (安永五年
 歿)
 安永
 檢校
 京都の人
 三絃の妙手

大雅堂

を好めるあまり、その頃の妙手なりし安永檢校といふ瞽者のちかどなりに、わざと卜居して、日々に人々にをしふるを聞きて、心をやられき。



ある時、安永が家にいたりて、かくことさらに近隣に卜居したるよしを告げて、一曲をのぞめり。安永、その志のねもごろなるを感じて、やがて側にありし三絃をさぐりとりて、弾きて聞かせきしかるに、その三絃裏皮やぶれたりければ、「いとふくつけけれど、おのれ一期のおもひでに、皮はたきにて今一曲をと乞ひけるに、安永、心よからぬおもちして、そこは何を業とし給ふぞ」と問ふ。大雅答へて、「繪をかき侍る」といふ。安永のいへらく、さは、そこは繪はいと拙かるべし」といふに、大雅おもへらく、一道に達しぬれば、よ

ろづのいたりも深きならひなれど、これは瞽者なるをいかでか繪事は知るべきと、なまかたはらいたけれど、いかなれば、おのれ繪のつたなきを知り給ふぞといふに、安永笑ひて、いま裏皮やぶれたる三絃にて弾きたるを飽かずおぼす、その聴きさまにて、繪のつたなさはしるきなり。すべて三絃は右に撥をもてれば、右手にて弾くこといふも更なれど、左手に精神なくては、妙處にはいたるべからず。いまわが左手の精神、その耳に入らぬをもて推すに、繪事もまた筆は右手に持ちてかく、いふもさらなれど、おそらくは左手に精神あらじと思ふがゆゑなりといひき。大雅いといたく感服懺悔して、深恩を謝してかへりて後、繪にふかく心やいたりけん、遂に世に鳴るばかり、一家をおこされたりき。「これひとへに安永檢校が恩にて、やがてわが繪の師なり」と、常にみづからいはれきと、大雅にうるはしかりし本間なにがし、これを語られき。

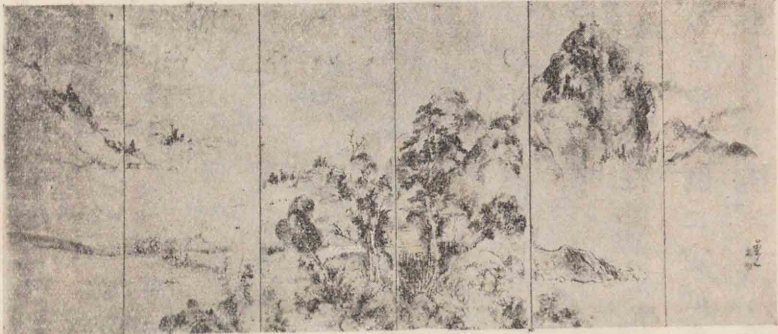
はかなき業といへども、いたりをきはめたるきは、人の耳目の及ばぬところにすら精神はみちたり。この物語もはらわが御國ぶりの要を得たり。ものいはんにも、打ちふるまはんにも、ふみ書かんにも、歌よまんにも、たゞ耳目のおよぶをのみかざりと心得なば、かの安永檢校にわらはれんかし。〔北邊隨筆〕

一七 大雅堂と蕪村

藤岡作太郎

文人畫家として有名なる池野大雅は、物に羈束せられず、奇行を以て世に稱せらる。されども、彼はこれをもてわざと世を驚かさんとするものにあらず。その行爲は、衒へるにあらず、その爛漫たる天真より出でたるなり。されば、頗る形式の末を輕んずれども、決して禮儀の誠意を失ふことなかりき。嘗て一豪富ありて、揮毫を請ひしが、荏苒として久しくその望をはたさず、使の至る毎に、近

山 水
池野大雅筆



日とのみいひぬ。一日、使またきたりたれども、畫はいまだ成らず。使門を出づとて、咄きて曰く、咄この畫工、人を勞すること幾度ぞ。自負か、懶惰か、人を侮るか。大雅これを聞きて急に使を呼びかへし、君が言ことわりなり。われ過てり過てりとして、直ちに筆を染めぬ。又一門生の贗畫を作る者あり。大雅怒つてこれを逐ひ、罪を謝すれども赦さずして曰く、貧は天のみ。恥を知らざるは人にあらずと。その他、愛顧をうけたる冷泉爲村の恩を忘れず、爲村の病めるや、日々その門前に至り、病狀を伺ひてかへれりといふが如き、又母の歿するや、葬るにあたりて親らその棺を擔

へりといふがごとき、一として至情の發露せしものにあらざるはなし。

大雅の人となりかくの如く、大雅の畫もまたかくの如し。一見すれば、唯意志の奔放に任せて、一氣に塗抹したるものに似たりといへども、更に熟視すれば、苦心の痕、歴々として畫面に溢るゝものあり。大雅好んで名勝を遊歴し、見る所、觸るゝ所、これをおのが藥籠中にをさめ、山川の状態、雲烟の變化、一々精察して至らざるなく、またよく古人の墨蹟を研究してその筆法を究め、而して後、漸く自家の特色を發揮す。これを輕々の筆といふは、眞に皮相の見に過ぎざるなり。

與謝蕪村は畫と俳諧とを以て世に鳴る。而してその俳諧に於けるや、世既に定評あり。今日の俳句を評する者、多くはこの翁を激賞して措かず。蓋し、芭蕉以後その道漸く腐敗しきたれるを、更

與謝蕪村

本名は谷口

寅 攝津國の人

畫 俳人にして

畫 家にして

(天明三年

歿)

秋景山水

(與謝蕪村筆)



蕪村の俳畫

彭百川
尾張眞淵
（寶曆三年
歿）



に清新なる格調を唱へて、その頹勢を挽回せる、所謂天明の改新は、蕪村をもてその功勞者の主位に置くべきなり。

蕪村が畫道の功も、敢て俳諧に譲らず。されど、生時は畫名いたく著れず。その聲價は、歿後にいたりて高くなりぬ。これ蕪村は

大雅に比するに
なほ數年の長に
して、その若く盛
なりし頃は、いま

だ文人淡泊の畫を賞する者少なりしと、また主としてその俳名に蔽はれしとに因れるなるべし。その畫、或は彭百川に學べりと
いへども、蕪村自ら稱して、吾に師なし。古今の名書畫を以て師と
すといへり。その元明諸大家の遺墨を研究して、以て一家を成せ
ること推して知るべし。

蕪村の畫がく所減筆の粗畫多く、また好んで芭蕉以來の俳諧の名家の像を畫がく。運筆簡にして狂恰も兒戲の如くにして而も興味津々たり。屢題するに俳句を以てす。後世俳畫と稱する略畫は、實にこの翁に至りて興りしなり。然れども、蕪村の作品はただこの種の粗畫のみならず、緻密なる山水等の畫も亦往々にして存す。その畫を作るや、一室に籠りて人の入るを禁じ、獨坐して思を凝らせりといふ。

蕪村の畫瀟洒にして飄逸、常人の憶測に及び難きこと、頗る大雅と相似たり。二人ともに斯道の天才にして、その妙趣は他の企及を許さず。然れども、二人に差別すべき所亦多し。大雅を天上の神とすれば、蕪村は下界の仙なるべく、文人畫家者流は、後者を以て俗氣多しとして取らず。田能村竹田評して、大雅正而不譎、春星譎而不正といへり。されど、なほ二人を品して、均是一代作霸之好敵

田能村竹田
名高い文人
(天保六年
春星
蕪村の別號
歿)

手と評し、更に蕪村を稱して曰く、用筆傳彩、全然明人、至其屋宇橋梁、布置點景、取諸邊邑僻境、所有之寔景、故景新法古、用意最深、高名下無虛士、洵不誣也。泛々たる世人の褒貶は取るに足らず。名流竹田の品隴は、以て蕪村の價を定むべきなり。(日本繪畫史に據る)

一八 天下第一の畫工

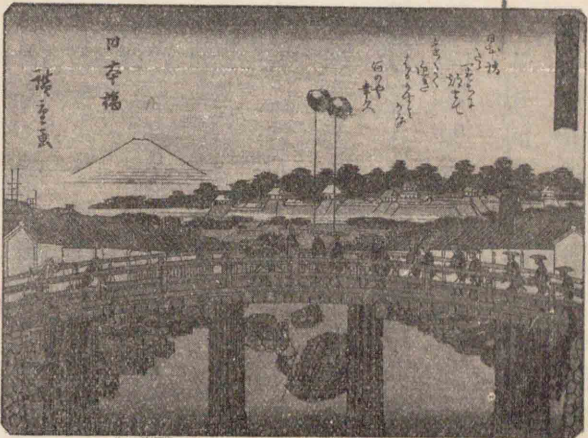
渡邊 華山

忘れも仕らず、私十二歳の時、日本橋邊通行仕候節、備前侯の御先供に當りて、打擲をうけ候時、子供ながらも大息して、備前侯は御歳大抵私と同年代なるに、大衆を率ゐて天下の大道を御横行なされ、私は同じ人間にて、天分とは申しながら、其の御先供に當りて打たる、事發憤に堪へず、今より何なりと志し候はば、如何なる儀にても出來申すべしと存じ、その頃高橋文平とて御祐筆を勤め申候者、私子供には候へども、日頃合口にて

渡邊華山
畫家
名は登
三河國田原
藩の志士
(天保十二
年自刃)

爽鳩先生
鷹見星卓

日本橋上の大
名行列
(歌川廣重筆)



の餘裕無之候。貧窮あまりに甚しく、筆紙のつくす所にも無
之候へば、弟どもは寺へ奉公に遣はし、又は出家致させ、妹は御
旗本へ奉公に遣はし申候。一人の弟は、私十四歳許の時、板橋

候間、この者に相談に及び、爽鳩先生
生の門に入り、儒者に相成申すべ
しと決心仕候。
然れども、私親父二十年來の持病
にて、一日も看病按摩を缺き難く
候間、朝夕退食の間、これを奉公同
様に相心得、母の手助け仕候。そ
の上、兄弟皆幼少にて、七人程も有
之、唯母の手一つにて病父も私ど
ももその日を送り候事ゆゑ、右様

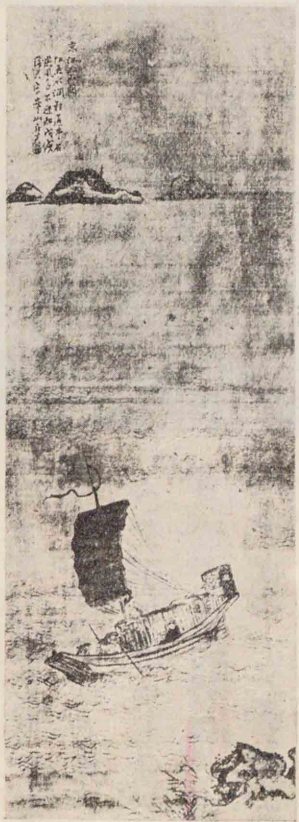
渡邊華山



まで生別れに送参り候が、その折ちらく降りくる雪の中
を、八九歳の弟が見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向き振向
き別れ候事、いまに目前に髣髴仕候。右弟は定意と申し、後に
熊谷宿にて客死仕候。雷之助と
申すは、七歳の時、青松寺と申す寺
へ奉公に遣はし、後に御旗本屋敷
へ養子に遣はし候。是以て食物
足らず、困窮之餘の事に候へば、養
子とは申しながら、丸裸にて、親不
知の様にて遣はし申候間、何事に
つきても、先方里方を侮り候を心外に存じ、終に京都へ出奔仕
候。その後、主人惜しき人物に存ぜられ、引戻され候處、是又數
年辛苦のはて、彼の地にて病氣に罷成り、歸府後間もなく終に

相果て申候。右のあらし故、妹兩人も一人は遠方へ遣はし、一人は貧家へ罷越し、貧死仕候。よくよく考へ候へば、至貧の上、親父大病に相罹り候爲、かくは兄弟過半、非命同様の病死仕候次第に御座候。これにて當時困難至極の儀、御察し下さ

江山圖
(渡邊華山筆)



るべく候。

私母近來迄

夜中寝ね候

に、蒲團と申

すもの、夜具

と申すもの、引きかけ候を見及び申さず候。破れ疊の上にごる寝仕り、冬は火燧にふせり申候。私親父大病故、高料の藥種、藥禮、日食の麵類等に事缺き、疊、道具の外大抵質物に置きつくし、猶親類共にも借りつくし候へば、僅か南鏡一片の儀にて、母

金陵
金子氏
畫家

事身内に當り候山伏の、本所一つ目に住居候方へ、助右衛門と申す弟を背負ひ、雪中を冒して罷越し、夜に入り候うて歸宅仕候事有之候。その節、私洗足の湯を沸かし候とて、衣服をこがし、大いに叱られ候儀、今に覚え罷在候。かゝる有様に候間、なほ高橋文平と相談仕り、とても學問など致し儒者に相成候とて、金のとれ候儀は無之、いづれ貧を救ふ道第一なりとて、爽鳩先生を頼み、芝の白芝山と申す畫工へ入門仕候。この時私十六歳に御座候。

然る處、貧人にて附届行届かずとて、僅か二年にて師家より斷をうけ申候。私もこの時に、如何仕るべきかと泣沈み候處、親父申候は、金陵事は御兩敬大森勇三郎様の御家來につき、その旨申したらば、憐み申すべしと申すにより、弟子に相成候處、金陵殊の外相憐み、少々は出來候様に相成候。されど半紙を調

文晁
谷氏
江戸の畫家

谷
文
晁

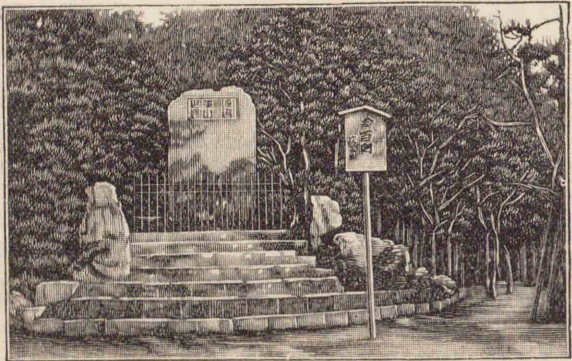
正月
文政二年



へ候手段無之候ま、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢
を取りて、紙筆を調へ申候。かく仕候間にも學問は仕度存候
へども、何分閑暇無之候へば、冬は朝七つ時に起出で飯を焚き、
その焚火にて讀書仕候。右は私を憐み、畫道に於て種々取立
てくれ候文晁が、毎曉起出で畫を認め
候咄を承りて、奮發致候次第に御座候。
右畫事、少々づつ内職と相成り、稽古も
出來候様相成候も、全く前爽鳩先生の
恩澤に御座候。
私廿六歳の正月元日、鈴木孫助宅にて
打寄り致候節、私申候は、何と、上かくの如く御困難なれば、各、方
も拙者も今より心がけ候はば、御政道を扶植可致道もこれあ
るべきとて、契約致す所有之候。 其の節、

見よや春大地もとほす地蟲さへ

と申す句仕候。これに依つて一齋へも申談じ、學問仕度候へ



一齋
佐藤氏
幕府の儒官

山
の
墓

ども、何分寸暇無之、夜中にても参り申
すべく、御門制の儀は然るべく御取り
なし下され候様、依頼致候處、親父へ申
遣はされ候趣、有之、即ち親父より村松
六郎左衛門殿へ、夜御門限の儀につき
願ひ候處、六郎左衛門殿より、儒者に無
之候うては御門制の儀仰せ出され難
き旨、御沙汰を傳へられ候につき、終に
折角の志相挫け果て申候。
つらく存候へば、上にして君に忠
下にして親に孝なるも、皆學問によりて辨ふべく、まして上に

忠ならんと欲すれば、無學・無術にてはかなひ難し。愈以て繪事を専らとして貧を助け、少しにても親を安堵させ申度と、これよりは更に一生御役儀相勤め候はんとは思寄らず、急にしては親の貧を助け、續しては天下第一の畫工と相成可申事に思を定め申候。(華山全集)

一九 輝く海

吉江 孤雁

今、我々はケープタウンから二千四百六十七哩の洋上にある。そして赤道洋上の赫耀たる光の波に、目を向けることも出来ない眩さを感じてゐる。實際、赤道洋上にあつては、海そのもの、空そのものが直ちに光である。

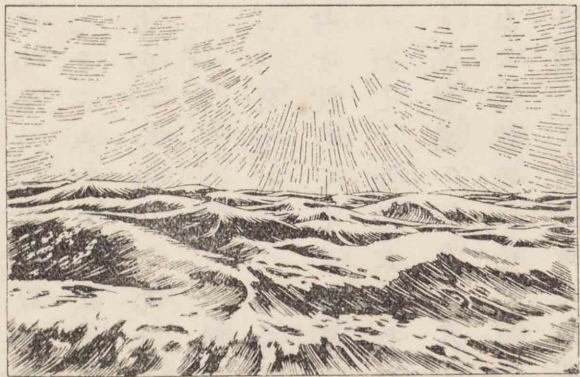
太陽は遮る何物もない上下の虚空に、何の遠慮もなく、何の隔意もなく、嬌恥もなく、赤裸々の自己の姿を現して、燃ゆるがまゝ、溶けて流るゝまゝに委せて居る。圓らかな水平線、天と水とを劃するこの一線は、今日はこの溶けて流れ、燃えて

漂ふ光を盛りあげる一大圓盤の縁をかざらんが爲に、引繞らされて居るもののやうに思はれる。

この時、深碧の潮の色と黄金を流す日の光との混じあふ波の間から、音もたてず無數に飛びいづる小さな銀色がある。この無數の小さな銀片のひらめきは、今までは溶けて流れ、とろ／＼して居る單調な光の世界に、一種の生動をおぼえさせる。

細かい銀鱗に刻まるゝ日の光！

はてしなき大洋上に見ゆるかぎりの唯一の生物！



赤道直下の海

彼等は、日頃の自己の棲家が日に暖められ、光に照らされるのにおどろいて、或は眩惑せられて、思はず銀鱗をふるひたてて飛ぶのであらう。群をなす數百の銀白の飛魚の姿には、互に先を争ふ惶しさとみだれとがある。そして、思はず誘はれて己の棲家は出たものの、空氣中のあまり晴々しいのと、光のあまり眩しいのとで、急に身羞しく感じでもするやうに、水の上を一町ほども飛ぶかと思ふと、不意に彈丸が水に飛び込むやうに、ぱた／＼ともとの波間へ身を沈めてしまふ。

寂しい波のたはむれ！

高原地の、何人も人間のゐない秋の野に、日を浴びて咲きみちてゐる無數の草花の頭の、何の故とも知らず、肯き合ふやうな華やかさ寂しさ、永劫おなじ黄金色の日の光、何處へも脱れて行くことの出来ない大洋の水、そのおそろしい單調に耐へられないで、波の飛

沫が、おのづと翼を生じて飛立つのではあるまいか。

いま我々の船は、赤道無風帯にはひつて居る。

我々の船を中心として描き出される、その中心の前進と共に、刻に移動して行く天と水との一大圓球、その半圓は、午前と午後とによつて、交互に光の波と紫紺の波とに代つて行く。午前には、右舷より見る半圓が船を境として一面光を流し、午後は、左舷の半圓が赫耀たる波を跳らせる。

この時、天空の半球は、直ちに光そのものの直立した壁となつて、水の半圓の上へ影を投げる。

正午の前後暫くの間、この交代のいまだ際立つて見えない時、太陽はマストの眞上に懸かつて、兩半圓に、また兩半球に、平等の光を直射してゐる。この時、この一大圓球の水上の中心は我々の船であり、天上の中心は太陽その物である。午日の直射に對して、船の

煙突から立つ微かな煙も、何方へも崩れずして、直ちに天に向ふ。その時、この白熱の洋上には何の響もない。たゞ船の胎内から奏し出す機關と暗車の響が、嘗て動搖に慣れたことのない重い空氣を驚かすだけである。そして、このとろ／＼する光の波を押切つて行く船の脚も、たゞ深い午睡に沈んでゐる水をさますだけで、醒めた水は、また聲も立てず、船の兩側から惶てて遠く逃げて行く。この動波、音を立てないこの動波は、磨ぎすました古代鏡の表面へ息を吹きかけるやうに、ばつと廣がつて、眠つて居る仲間を呼びさまして、兩手を擴げ脚を動かして、遠空の下へ、水平線の彼方、淡青色を湛へた一層の眠の國、不動の境地へと逃げて行く。

刻々に日は傾き、右舷の洋上は濃い影を刻んで、空に多少の爽涼の氣を漂はせる時になつても、この魅せられたやうな靜寂は、つひに破られない。たゞ、光のはげしい抱擁をのがれたこの半面は、ほととしたやうに、のび／＼と紫紺の波を平かに敷きつめて、如何なる微動をも表面へうかばせず、如何なる些細な表情にも、その平靜を裏切りはしない。

日の落ちゆく半圓には、いま烈しい光波の亂射がはじまつてゐる。太陽は、もう少しの物をしもしない。あらんかぎりの光が、水上へ落ち散るまゝに委せてゐる。今日一日の爲に燃やしたる熱度の續くかぎり、光波が剝落して波上へ散布するのを、寧ろ悦んでゐる。

太陽そのものが、光から早く脱して、休息の床へ入りたいやうに、幾重もの光の衣装を、後から／＼と波の上へ投げかける。

光に酔ひ疲れた波は、もはやこの太陽の惜氣もなく、投與ふる賜物を、何處へも持運ばないで、たゞその下で受けてゐるだけになつた。太陽が水上からやゝ高いときは、一時にばつと燃えて、光その

ものの如くであるが、それを最後として、もはや何等眼を射るやうな光は放たない。今は光波を脱しつくして、たゞ一個の眞紅の圓體——自然が刻み出した一大名玉の匂の高い藝術品となる。眞紅の色はやがて緋となる。この時、波はたゞその眞紅の色、緋の色を小さな波頭へ照り返して、時に唇を開けてその色を吸はうとして居るだけである。もう光ではない。たゞ色彩である。

たゞこの時、俄にくつきりと下から浮びあがるものは、水平線である。今までは、光波の中へ没せられて、この藍青の一線の所在は忘れられてゐたのだが、今や俄に紺青の色を増して、眞紅の名玉をその上に戴き、暫くそれをその線上でまろばしてゐるかと思ふと、忽ちその下の一端を、藍色に包みはじめ。

この横にひいた一線を境に、背景は黄光の豊かな圓蓋である。前景は、にはかに活氣づいて來る濃藍の水の曠野である。

太陽はいま光ををさめて、その圓蓋の中へ、曠野の果へ、濃い一線の下へ、次第々々に引入れられて行く。(輝く海)

二〇 旅人の山

小島 鳥水

曉の空に、大宮表口の裾野原は、薄紙をはがすやうに目がさめる。



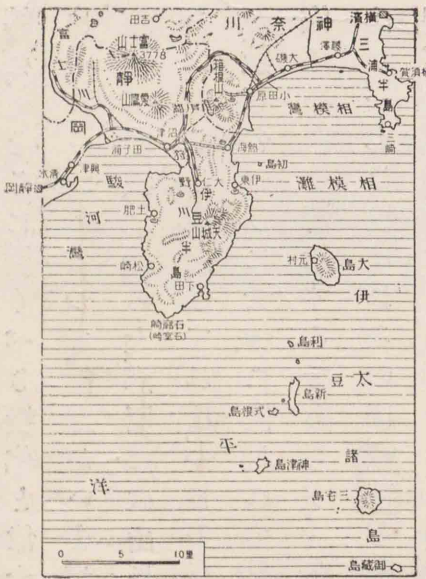
ほととぎすがしきりに啼く。富士のさばいた裳裾が、斜がちな大原に曳く境目に、光といはんには弱いほどの一線の薄明が、横さま

小島鳥水
名は久太
銀行員

富士山
(今尾景年筆)

にさす。正面を向いた富士は平べつたくなつて塔形にすわりが
いゝ。たゞ劍ヶ峰の頂のみが鎗のやうに際立つてとがつて見え
る。雲は野火の煙の低迷する如く富士の胴中を幅びろに斜断し
て、残んの月の淡い空に龍巻してゐる。うぐひすのなく音もまじ
る武蔵野に見るやうな黒土を踏んで、うら若いひのきの植林が一
塊に寄り添つてゐる。私たちの足許には、釣鐘草はぎ擬寶珠われ
もかうが咲く。瑠璃色の松蟲草と、大原の水分を一杯に吸ひこん
で、ふくらんだやうな桔梗の蕾からは、萩が立ち初めてをる。秋の
野になくてかなはぬすゝきと女郎花は、盂蘭盆のお精靈に捧げら
れるために生まれて來たやうに涙もろく、ひよろりと立つてゐる。
仰げば、朝焼で一天が燃えてゐる。夕焼のやうに混濁した朱で
なくて、聖くて朗かな火である。富士の斜面のひだは均整せられ
て、端然たるが中にも、その高いところは光を強く受けて、浮彫につ

富士山地方圖



まみあがり、低い裂け目には暗い影が漂つてゐる。全體としては、
素焼の陶器の雅味である。富士が小さく見えるのもこれだ。表
裏にまはり、左右から見直しても、いづれもおなじ姿の八字の輪廓
と圓錐の形式とは、連嶺構造の山と、鋭利に切り込まれた深谷とを
見た目には、浅いものに見えるかも知れぬ。だが、それは大裾野を
忘れてゐるからだ。裾野は富
士^{の物だ。}富士の物を富士に
返して、東海の濱にまで引きさ
がり、さて仰いで見たまへ、それ
から数十里の裾野を、曲馬の馬
が同じ圓周を駆けめぐるやう
に回つて見たまへ、それこそ富
士といふ彫刻品の線と面の回

轉だ。そこに驚くべき變化と偉大さを發見するだらう。あるひは一步さかのぼつて、裾野がいまだ生成しないうち、富士と愛鷹と箱根が、陷没地帯の大海原に、火山島のやうに煙を吐いてうかんでゐたところを想像すれば、今日の豆南諸島の大島・利島・三宅島などが、敷石のやうに大洋に置かれてゐるのと似て、更に大規模なる山海の布置を構造するであらう。今のやうな裾野となつて、富士登山が一しほ悦ばれるのは、絨毯を敷く緑青の草と濕分を放散する豊富な潤葉樹林とにあらう。旅人がアンデスの登山を喜ぶのは、麓が永久の春の如くであるからださうだが、山の天國は、發達した裾野を有するこの富士火山帯に多くありといはねばならない。

それから山の全裸體像として、線や、光や、影や、圓味やを研究するのには、富士ぐらゐる祕密を許してくれる山はあるまい。縦横は素より、富士ばかりは恐らく螺旋狀にでも上れよう。結局、富士は探検

アンデス山

あめつちの
わかれし時
ゆ 萬葉集にあ
る長歌
は 時知らぬ山
は 時知らぬ山
は 富士のね
かいつまでか
らに雪のふ
るらん
(伊勢物語)



家の山でなくて、女でも子供でも老人でも、心易く登れる全人類の山だ、殊に旅人の山だ。私も旅人として富士を讚美する。アルプスの美を知覺的に讚美したのは、スキスの農夫でなくて旅人であつた如くに、富士山もさうであつた。

「あめつちのわかれし時、神さびて」と歌つた山部赤人は旅人であつた。太刀持つ、馬の口と、仕丁どもを召連れ、馬上袖をからんで、時知らぬ山は富士の根と詠じた情熱の詩人在原業平も、流竄の途中に富士を見たのであつた。墨染の衣を着た坊さんが、網代笠を片手に杖ついて、富士にむかつて休息してゐるとすれば、問はずして富士見西行なる事を知る。富士くらゐ大

富士見西行

詩人を持った山が、地球上のどこに存在してゐるだらう。名もな



い一遊子ではあるけれど、私も幼い時から富士の影を浴びて、武蔵相模で育つた一兒童として、永い間の外國生活から故國へ放還された一旅人として、いま富士の膝下へ来て、父祖の顔に見えまつるが如く、しみじみと見てゐるのだ。

今にも大野原の上を自由に飛翔しようとする大鳥が、羽翼を收めて暫く休息してゐるやうな勢を、富士は取つてゐる。空氣はビードロのやうに薄青い光を含んで流動してゐる。そして野も山も森も、朝の光線にひたつて、幻からはつきりと物體のつかめる現實の世界となつた。(不盡の高根に據る)

二一 生命の芽生

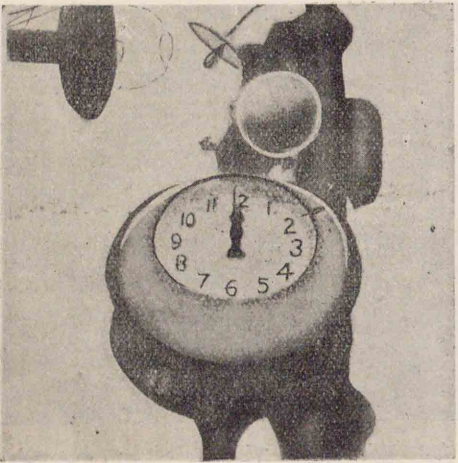
相馬 御風

震災地から遠く離れた静かな田園に生活してゐる私達でさへ、やつとこの四五日、いくらか氣持がおちついて來たに過ぎない。

引きつゞき東京や横濱にゐる人達の、昨今の心持はどんなであらう。私達には全く想像も出来ない。

秋は日に／＼深くなつてゆく。農村ではもう稻刈が始まつた。日一日と空は澄んでゆく。月の光が夜毎にさやかに増す。このさやかな月の光は、おなじく惨禍の跡をも照らしてゐるに違ひない。その荒涼たる惨禍の跡に、夜毎に冷かさを増し

大地震の時刻を示す時計



——しかも偶然にも、人間の運命のどん底を見きはめることを得た人々——それら多数の人々に對しては、私達は何よりも先づ、あらたなる尊い生命の芽生を期待しなくてはならない。冬枯の野に萌え出づる春待つ草の、新しい芽生のそのやうに、寂然たる運命のどん底に徹した人々の心の底から、湧きあがるべきあらたな生命の泉——それをこそ、私達は眞に期待すべきである。

一回目の震動と同時に、家屋の倒潰に逢ひながらも、不思議に全家族無事なるを得たといふ大磯の友からの音信にも、次のやうな一節があつた。

「二階のつぶれ落ちた刹那、おどろきのうちに不思議なる勇氣の湧くをおぼえ候。だれもさういふ感を懷き候事と存候。すべてのものの枯れつくしたる土より、新しい芽の出づるやうに、全く新しい生命を甦らさねばならぬと存候。」

何といふ涙ぐましくも力強い叫であらう。「これだ、これだ。私はその手紙を手にしたがら、幾度かさう叫んだのであつた。

この世において最も確なもの、最もしつかりした物の第一に數へてゐた大地そのものすらも、たよりにならないといふことを痛感した人々も、少なくなかつたであらう。

しかし、その最もあてにならない自然は、やはり私達の最もあてにしなくてはならない自然である。自然は破壊する、自然は殺す。しかし、それと同時に自然は創造する、自然は生む、自然は育てる。

自然を呪ふ心に、私達は囚はれてはならない。自然に對しては、



日本橋通
(昭和三年)

私達は飽くまで感謝の念を捧げなくてはならない。荒涼たる冬
枯の野にこそ、新しい芽は萌え出るのである。(越後から)

三三 震災所感

逍遙

坪内雄藏

おほなみゆり大火あれて幾代々の
人の力のあとかたもなき

逍

遙

逍遙筆蹟

藤村

島崎春樹

人々をしぐれよ宿は寒くとも
右、芭蕉の句一つかきつけました

藤

村

大震災
おほなみゆり大火あれて幾代々の
人此力乃 幾代々の
此力乃

震災後の霜月六日 麻布飯倉にて

人々を志ぐれよ宿を寒くとも

右、芭蕉の句一つかきつけました

震災後の霜月六日、麻布飯倉にて

島崎春樹

藤村筆蹟

井泉水

萩原藤吉

焼け残されし椅子一つあり腰を据う

井

泉

水

小劍

上司延貴

美しき東京の芽蕉土の下に

小

劍

晶子

與謝野氏

光明を捨てし都かみづからを

晶

子

焼くほのほあげあかくすれども

晶子筆蹟

夫がと捨てた都の山を
たぐりては上げけり
あはれ

善磨
士岐氏

善

磨

善磨筆蹟

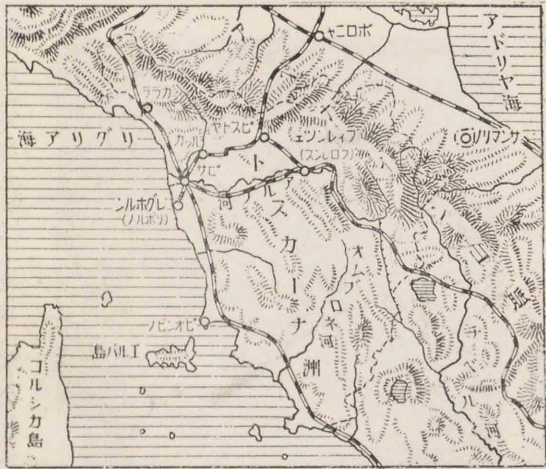
庭 題 三首
ゆりくづれ焼かれつくすを
ひた前に大地のうへに
ひれ伏しにけり
渦まく焰のそこに顔うちふせ
この妻子らを守り
おほせたり
物ひとつ今はあまきす失へる
われのすがたを悔いしむなゆめ

下位春吉
現代の伊太
利文學者

二三 詩聖ダンテ

下位 春吉

トスカーナ地
方圖



南歐の詩の國イタリアの中央西部に、トスカーナ州といふ地方がある。紫の葡萄の野の彼方此方に
絲杉の木立が並ぶ。東方のアペニン山にはぐくまれて、アルノの河がう
ねうねと西へ流れる。その河波に洗
はれるフィレンツェといふ町がある。
「花の都」といふ意味で、昔から文藝の花
の咲き亂れた都であつた。西紀千二
百六十五年春五月なかば、詩聖ダンテ
はこの「花の都」フィレンツェに生まれ
た。「我は麗しきアルノの流のほとり、

大きな館に生まれ、人となれり……」と彼自らが「神曲」のうちに物

語つてゐる。

當時、全ヨーロッパは争亂の渦
卷の中に捲き込まれてゐた。イ
タリヤとても群雄割據の亂世で、
「花の都」も雄たけびの聲、蹄の音、劍
戟の響に包まれてゐた。ダンテ
も戦争の裡に育つて、若き頃より
劍を取つて戦場を馳驅し、使節と

ダ
ン
テ



なつて他の都市にも遣はされたが、反對黨の敵どもが勢力を得る
に至つて、彼は追放の刑に處せられ、アルノ河上の故郷に妻子を殘
したまゝ、孤影悼ましく漂泊の旅に上つた。時に西紀千三百二年
三月、彼が三十七歳の春。

春の燕、秋の雁、漂浪のうちに歲月は流れた。ダンテは貧苦と不
遇の中に、一片のパンを求めて東に西に流浪した。北イタリヤの
ベローナ市に、當時、飛ぶ鳥を落す權勢のあつた城主のもとに客と
なつてゐた幾年と、晩年、沃野千里のローマーニヤ州なるラベンナ市
の一貴族の邸に賓客となつてゐた頃とが、涙多かりし彼の暗い苦
い生涯に、一道の光明を投げた期間である。

折しも歐洲の大勢力なりしベネチヤ共和國が、軍兵を提げて一
舉にラベンナ市を攻めようとした時、ダンテは乞はるゝ儘に水の
都のベネチヤに使用して、その重大な任務を果しての歸るさ、マラリ
ヤ熱病に罹り、途中で病勢急に革つて遂に不歸の客となつた。時
に西紀千三百二十一年九月十四日。

世人は彼を詩聖といふ。然り、彼は偉大なる詩人であつた。し
かし、彼は又同時に政治家であり、軍人であり、哲學者であつた。

彼の作品の最も大なるものは、言ふまでもなく「神曲」である。幽冥界の遍歴を叙せる三篇百歌の大詩篇は、世界文學史の驚異である。彼はこの詩の中に、その時代までの神學、哲學、天文學、歴史、神話等を統一し、かつ詩化した。その外なほ幾つかの小作品がある。ダンテ學は一の専門の研究であり、かつ一人でその全般に通ずる事は到底不可能である程に、廣汎な學問である。聖書を除いて全世界を通じて最も多くの研究書が出版されてゐるのは、これであるといはれてゐる。

政治家、軍人、學者……等のあらゆる愛國的演説や論文には、必ずダンテの句が引用される程、この詩聖はイタリアの國民精神の中心になつてゐる。

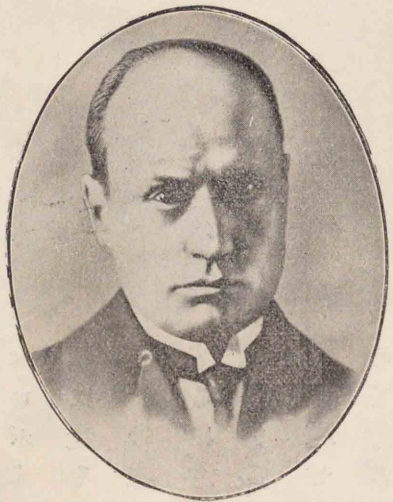
詩聖ダンテの墓は、ローマニア州のラベンナ市にある。ローマニア州は、住民の直情、潔白、精悍なるを以て全イタリアに知られて



(筆ニータスカ・ルデ・アレドンア)

詩聖ダンテ

ムツソリーニ



ある。現イタリヤの首相、熱血兒
ムツソリーニを生んだのも、この
州である。

西紀千九百二十一年九月十四
日は、實に詩聖逝いて六百年に當
る。伊國政府はその生地フィレ
ンツェ市と遠逝の地ラベンナ市
と彼が一生の大理想たりし羅馬とで、盛大なる六百年祭を擧ぐる
事になつた。そしてその順序は、最初にラベンナ市、次にフィレン
ツェ市、次にローマ市で、その當時世界のダンテ渴仰者は言ふまで
もなく、苟も南歐の藝術にあこがる、歐米人は、皆淨き巡禮となつ
て伊國に流れ込んだのである。

(詩聖の墓の鐘樓守に據る)

オリンピヤの
競技(想像畫)



に一部分のみ發掘された競技場の址は、彼等が一世の晴の場所であつた。いまはその入口に葛藟が高く茂り合つて、羅馬時代に建てた凱旋門のなかば壞れたのに纏はつて居るのが、いかにも名譽の月桂冠でももあるかのやうに見える。

大競技は四年に一度の大祭日に催された。この日は神聖なる平和の日として、希臘全土の人々が敵味方を忘れてこれに列したのである。希臘全土の一致結合

ヘロドツス
希臘の歴史家



は、このオリンピヤの競技によつて出来たといふも過言ではない。

國民全體が面白く愉快にこゝにまつまりきたり、各州の選手が雲を呼び風をおこし、龍虎相搏つたのは、いかに壯快にかつ目ざましかつたであらう。

あつまつて來た人々の中には詩人もあつたであらう、學者もあつたであらう、ヘロドツスの如き歴史家も、デモステネスの如き雄辯家も、テミストクレスの如き勇將も、さては政治家、法律家、富めるも貧しきも、名門も平民も、あらゆる階級、あらゆる職業の人が、互に顔をあはせ、談

デモステネス
アテナの雄辯家



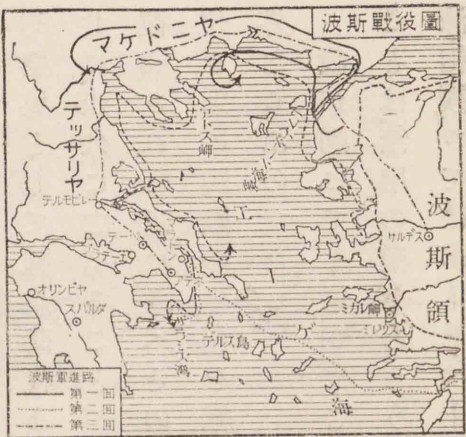
門も平民も、あらゆる階級、あらゆる職業の人が、互に顔をあはせ、談

テミストク
レス
アテネの名
將
ス
テミストクレ



ころがなかつたであらうか。また文學者があつたなら、彼の流暢なる筆は、この群集によつて得るところがなかつたであらうか。想ふにこの競技は、單に競技そのものの進歩をきたしたのみでなく、哲學、歴史、戯曲、音樂、彫刻などの發達に影響を及ぼしたことも、決して鮮少ではなかつたであらう。

この祭には、市場が立つことになつて居た。物質の交換、賣買が、いかに全國の商業、農業を益したことであらうか。かくて思想、知識の交換、延いては感情の融和が、國民の一致に貢獻する所があつ



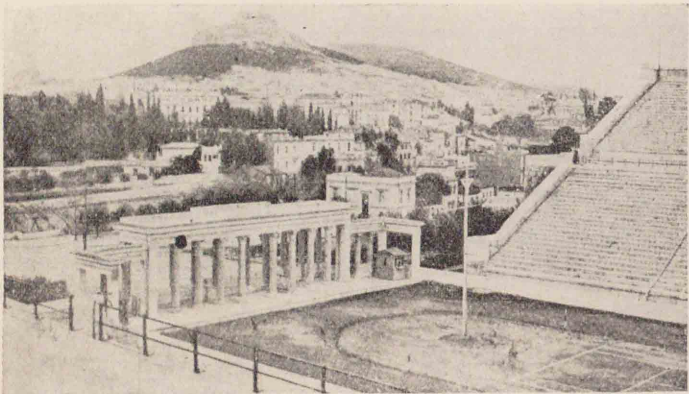
たと同時に、商工業等にも相影響したものが多かつたのである。彼等は、ペルシヤ戦争において、國民的敵愾心の絶頂に達した。小忿を忘れて大敵にあたり、よく東方の強を挫く事が出来たのは、このオリンピヤの競技に負ふところが少なくないと思ふ。しかもその競技は、決して職業的ではなかつた。選手は、皆各州から送られた青年であつた。そして羅馬時代に入つて職業的となつた時は、この競技のはや衰へはじめた日であつた。言換へれば、この競技は全國民をして眞の勇者たらしむるにあつたのである。そして、全國民の體格と意志との發達は、この競技によつて益、促進せられたのである。古代希臘における教

育のモットーは、一言にて盡きる。曰く、健全なる肉體に健全なる精神宿ると。たゞこの健全なる精神を養成せんがために、健全なる肉體を作るに苦心したのである。希臘の彫刻にはこの意味が現れて居る。希臘の文字にも亦この意味が見えて居る。

オリンピヤの祭典は、かくて希臘の歴史始まつて以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連続した。その事蹟は、希臘の文化と共に、永久に亡びることがないであらう。近頃歐洲にこの競技が復興され、極東にさへその開設を見るに至つたのも、また世界の文化を進め、國際の平和を維持せんとする、古代希臘の精神の復興に外ならぬのである。

我が國にても、單獨にこのオリンピヤ競技のやうなものを開くことは、無用の業であらうか。我が國固有の劍道柔道より、駈足水泳相撲、さてはボート、ベースボール、フットボール等に至るまで、各

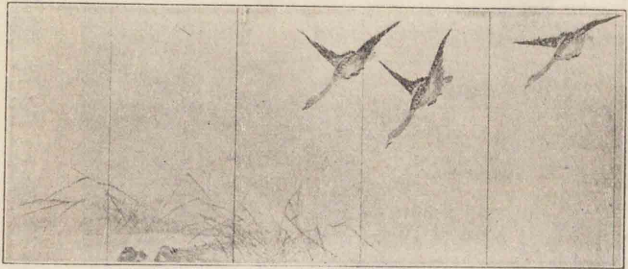
オリンピヤの
スタデイオン



階級を通じ、各地方に亘り、擧つてその選手をいだして壯快なる競争をなさしめ、觀覽者も全国各地より雲

集する一のスタデイオンを有せざるは、盛世の遺憾ではなからうか。

余のオリンピヤに遊ぶや、雷雨を衝いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草叢々たる競技場を徘徊して、古代希臘の文化の淵源の茲に存することに想到した時、覺えず一種の希望をおこした。それは、我が國民の擧つて崇敬し奉る伊勢神宮に一大スタデイオンを建て、一定の日を以て全國民の競技を演ぜしめよといふことであつた。(歐米文明記)



二五 かりがね

島崎 藤村



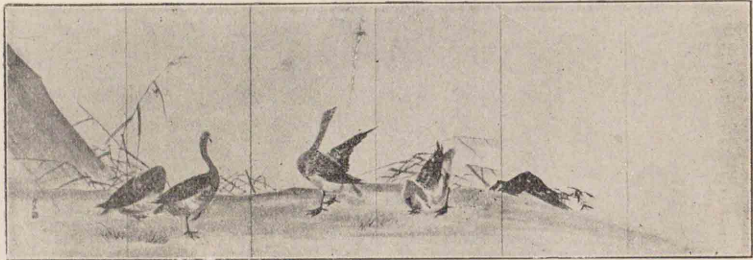
もあらばあれうぐひすの
たくみの興はつくさねど、

または深山のこまぢりの
しらべの程はうたはねど、
まづかざりなき一聲に、
涙をさそふ秋の雁。

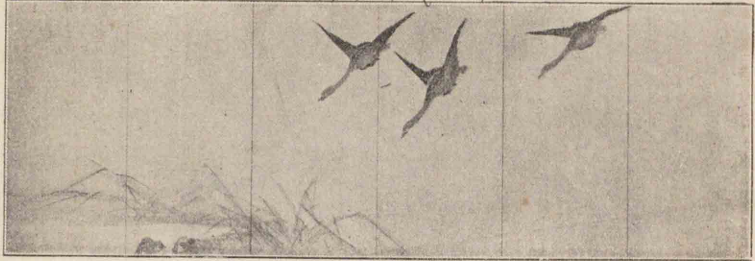
長きなげきはもらすとも、
なほあまりあるかなしみを
うつすよしなき汝が身か、

なごかく秋を呼ぶ聲の
荒きひゞきをもたらして、
人の心を見だすらん。

あゝ秋の日のさみしさは、
小鹿のしれるかざりかは、
清しき風におどろきて、
羽袖もいとゞひゞかに、
百千の鳥の群をいで、
うかべる雲になるゝかな。
菊より落つる花びらは、



六御府
 左衛門府 右衛門府
 右 左 右 左
 左衛門府 右衛門府
 右 左 右 左
 右 左 右 左
 右 左 右 左



汝が^なついでばむにまかせたり。
 時雨に^{なれ}深むるもみぢ葉は、
 汝が^{なれ}かざすにまかせたり。
 聲を放ちてさけぶとも、
 たれかいましをとゞむべき。
 星はあしたにひやゝかに、
 露はゆふべにいとしろし。
 風に^{なれ}したがる桐の葉の、
 枝に別れて散るごとく、
 みそらの海にうらぶれて、
 たちかへり鳴け秋のかりがね。
 (藤村全集)

右兵衛佐殿
 源頼朝

九月十八日
 治承四年

二六 水鳥の羽音

さる程に右兵衛佐殿謀叛の由、しきりに風聞ありしかば、福原には公卿僉議ありて、今日も勢のつかぬ先に、急ぎ討手を下さるべしとて、大將軍には小松權亮少將維盛、副將軍には薩摩守忠度、侍大將には上總守忠清を先として、都合その勢三萬餘騎、九月十八日に新都を立つて、明るる十九日には舊都に着き、廳て同じき二十日の日、東國へこそ赴かれけれ。
 大將軍小松權亮少將維盛は生年二十三歳、容儀帶佩繪に書くとも筆も及び難し。重代の着背長、唐皮といふ鎧をば、唐櫃に入れて鼻かせらる。道中には赤地の錦の直垂に、萌黄匂の鎧着て、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗りたまへり。
 副將軍薩摩守忠度は紺地の錦の直垂に、黒絲絨の鎧着て、黒き馬

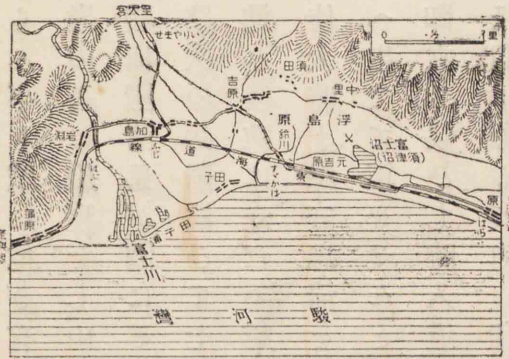
の太う逞しきに、沃懸地の鞍を置いて乗り給へり。馬鞍、鎧兜、弓箭、太刀刀に至るまで、照耀く程に出立たれたれば、珍しかりし見物なり。昔は、朝敵を平げに外土へむかふ將軍は、先づ参内して節刀を賜はる。宸儀南殿に出御して、近衛階下に陣をひき、内辨、外辨の公卿参列して、中儀の節會を行はる。大將軍、副將軍、各禮儀を正しうしてこれを賜はる。承平、天慶の蹤跡も、年久しうなつて準へ難しとて、今度は讃岐守平正盛が、前對馬守源義親追討の爲に出雲國へ下向せし例として、鈴ばかり賜はつて、皮の袋に入れて、雑色が頸に懸けさせてぞ下られける。いにしへ朝敵を平げんとて都を出づる將軍は、三つの存知あり、節刀を賜はる日家を忘れ、家を出づるとて妻子を忘れ、戰場にして敵に戦ふとき身を忘る。されば今の平氏の大將軍維盛、忠度も、定めてさやうの事どもをば存知せられたりけん、あはれなりし事どもなり。

各、九重の都を立つて、千里の東路へ赴かれける。平かに歸り上らん事も誠に危き有様どもにて、或は野原の露に宿を借り、或は高嶺の苔に旅寢をし、山を越え、河を重ね、日數経れば、十月十六日には駿河國清見が關にぞ着き給ふ。都をば三萬餘騎で出でたれども、路次の兵附添ひて七萬餘騎とぞきこえし。先陣は蒲原富士川に進み、後陣は未だ手越、宇津の谷に支へたり。大將軍權亮少將維盛侍大將上總守忠清を召して、維盛が存知には、足柄の山打越え、廣みへ出でて軍をせんとはやられけれども、上總守申しけるは、「福原を御立ち候ひし時、入道殿の仰には、『軍をば忠清に任せさせ給へ』とこそ仰せ候ひつれ。伊豆、駿河の勢の参るべきだに、いまだ一騎も見え候はず。味方の御勢七萬餘騎とは申せども、國々のかり武者、馬も人も皆疲れはて候。東國は、草も木も皆兵衛佐に従ひ附きて候ふなれば、何十萬騎か候ふらん。たゞ富士川を前にあてて、身方

の御勢を待たせ給ふべうもや候ふらんと申しければ、力及ばでゆ
らへたり。

さる程に、兵衛佐頼朝鎌倉を立つて、足柄の山打越え、黄瀬川にこ
そ着きたまへ。甲斐・信濃の源氏ども馳來
つて一つになる。駿河國浮島が原にて勢
揃あり。都合その勢二十萬とぞ記いたる。
常陸源氏佐竹四郎が雑色の文持つて京へ
上りけるを、平家の侍大將上總守忠清、この
文を奪ひ取つて見るに、女房の許への文な
り。苦しかるまじとて取らせてけり。さ
て、源氏が勢はいかほどあるぞと問ひけれ
ば、下郎は四五百千までこそ物の數をば知
つて候へ。それより上をば知り參らせぬ候。多いやらう、少ない

富士川附近の
地圖

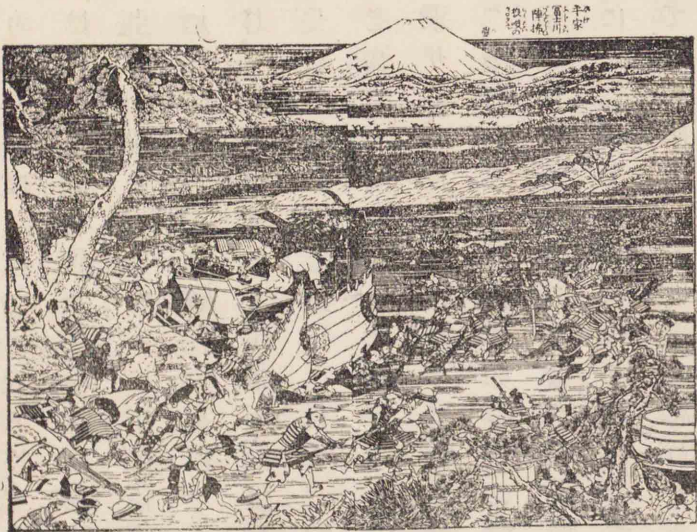


やらう、凡そ七日八日が間は、はたと續いて、野も山も海も河も皆武
者で候。昨日黄瀬川にて人の申し候ひつるは、源氏の御勢二十萬
騎とこそ申し候ひつれと申しければ、上總守あな心憂や。大將軍
の御心の延びさせ給ひたる程、口惜しかりけることはなし。今一
日も前に討手を下させ給ひたらば、大庭兄弟、畠山が一族などが參
らで候ふべき。これらだに參り候はば、伊豆駿河の勢は皆從ひ附
くべかりつるものをと、後悔すれども甲斐ぞなき。

大將軍權亮少將維盛、東國の案内者として長井齋藤別當實盛を召
して、汝程の強弓精兵、八箇國にはいか程あるぞと問ひ給へば、齋藤
別當あざ笑つて、さ候へば、君は實盛を大箭と思召され候ふにこそ。
僅か十三束をこそ仕り候へ。實盛程射候者は八箇國にはいくら
も候。大箭と申す定の者の十五束に劣つて引くは候はず。弓の
強さも、したゝかなる者の五六人して張り候。かやうの精兵共が

射候へば、鎧の二三領はた易うかけず射徹し候。大名と申す定の者の五百騎に劣つて持つは候はず。馬に乗つて落つる道を知らず。悪所を馳すれど馬を倒さず。軍は又親も討たれよ、子も討たれよ、死ぬれば乗越えく、戦う候。西國の軍と申すは、すべてその儀候はず。親討たれぬれば引退き、佛事孝養し、忌明けて寄せ、子討たれぬれば、そのうれへなげきとて寄せ候はず。兵糧米盡きぬれば、春は田作り、秋刈收めて寄せ、夏は暑しと厭ひ、冬は寒しと嫌ひ候。東國の軍と申すは、すべてその儀候はず。その上甲斐信濃の源氏等、案内は知つたり、富士の裾より、**搦手**にや廻り候はんずらん。かやうに申せば、大將軍の御心を臆せさせ參らせんとて申すとや思召し候ふらん。その儀では候はず。但し軍は勢の多少にはより候はず、大將軍の謀によるとこそ申し傳へて候へ」と申しければ、これを聞く兵ども、皆震ひわな、きあへりけり。

富士川對陣
(平家物語圖會)



さる程に、同じき二十四日の卯の刻に、富士川にて源平の矢合とぞ定めける。二十三日の夜に入つて、平家の兵ども源氏の陣を見渡せば、伊豆駿河の人民百姓等が、軍に恐れて、或は野に入り山に隠れ、或は船に取乗つて海河に泛びたるが、いとなみの火の見えけるを、あな夥しの源氏の陣の遠火の多さよ。實にも、野も山も海も河も皆武者でありけり。如何せん、とぞあきれける。その夜の夜半ばかり、富士の沼にいくらもありける水鳥どもが、何にかは驚きた

りけん、一度にばつと立ちける羽音の、雷大風などのやうにきこえければ、平家の兵ども、あはや源氏の大勢の向うたるは。昨日齋藤別當が申しつるやうに、甲斐・信濃の源氏等、富士の裾より搦手へや廻り候ふらん。敵何十萬騎あるらん。取籠められては叶ふまじ。爰をば落ちて尾張川洲股を防げやとて、取る物も取敢へず、我先に我先にとぞ落行きける。餘りにあわて騒いで、弓取る者は箭を知らず、箭取る者は弓を知らず、我が馬には人乗り、人の馬には我乗り、繫いだる馬に乗つて馳すれば、株を廻る事かぎりなし。

同じき二十四日の卯の刻に、源氏二十萬騎、富士川に押寄せて、天も響き大地もゆるぐばかりに、関をぞ三箇度作りける。平家の方にはしづまりかへつて音もせず。人を入れて見せければ、皆落ちて候と申す。或は敵の忘れたる鎧取つて参る者もあり、或は平家の捨置いたる大幕取つて歸る者もあり。凡そ平家の陣には蠅だ

にも翔り候はずと申す。兵衛佐急ぎ馬よりおり、兜を脱ぎ、手水うがひをして、王城の方を伏し拜み、これは全く頼朝が私の高名にはあらず、偏に八幡大菩薩の御はからひなりとぞ宣ひける。

やがて打取る處なればとて、駿河國をば一條次郎忠頼、遠江國をば安田三郎義定に預けらる。猶も續いて攻むべかりしかども、後もさすがおぼつかなしとて、駿河國より鎌倉へぞ歸られける。

海道宿々のものども、あないまゝし討手の大將軍や、軍には見逃げをだにあさましきことにするに、平家の人々は聞逃げし給へりとぞ笑ひける。さる程に、落書ども多かりけり。都の大將軍をば宗盛といひ、討手の大將をば權亮といふ間、平家をひらやよみなして、

ひらやなるむねもりいかに騒ぐらん

柱とたのむすけをおとして

ふじ川の瀬々の岩越す水よりも
はやくも落つる伊勢平氏かな

又上總守忠清が富士川に鎧捨てたりけるをもよめり。

富士川によるひは捨てつ墨染の

衣たゞきよ後の世のため

(平家物語)

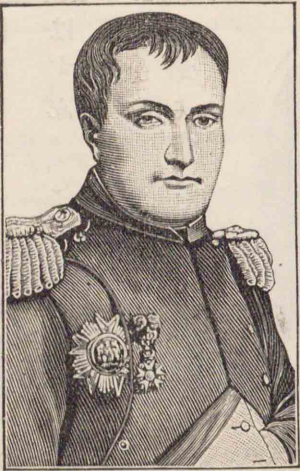
二七 功名心

竹越 三 又

功名心は虚榮心ではない。虚榮心は心の卑しい婦人の有つものである。心の卑しい婦人は、左右の手に數個の指環を嵌め、その燦然たる光によつて同輩に誇り、或は流行の衣服を着て、そのきらびやかなる扮装を傍人に誇らうとするが、若し此の指環を注視する者がなく、此の衣服を望見する者がなければ、其の心に淋しさを

ナポレオン
フランソワ
帝
(西紀一七
六廿一
八二一)

ナポレオン



Napoleon

感ずるものである。斯様に虚榮心は、他を嫉つて己を慰めるものである。

功名心はさうでなく、大きな人から湧出る一の波動で、恰も大きな鐘が、大きな音を出すのと同じである。功名心は、己自らに對して満足を得なければ止まないものである。他人は攻撃してもよい、嗤つてもよい、又褒めてもよい。自分は自分で、自分の爲さうと思ふ所を爲さねばならないのが功名心である。ナポレオンがこれを註釋して、功名心は豪傑の欲情にして、これあるものは、或は大善をなし、或は大惡をなす。唯其の主義の善惡如何を問ふべきのみ」と言つたのは、流石に功名兒だけあつて、能く其の消息を言ひ盡

男子云々
(晋書)

クロンウエル
英國の政治家
(西紀一五
九一—一
六五八)

クロンウエル

したものと謂つてよい。晋の桓温は「男子芳を百世に流すこと能はずんば、當に臭を萬世に遺すべし」と言つた。固より臭は人の希ふべき所でないから、唯言語の文として斯う言つたのに過ぎまいが、最も能く功名兒の心裏を表明して居る。クロンウエルは大統

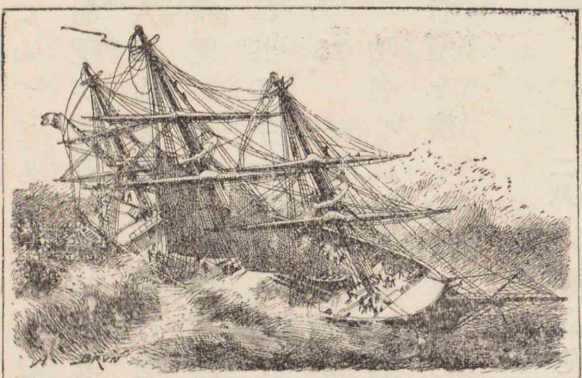


Oliver Cromwell

領の位に即いた時、ロンドン市民が雲霞の如くあつまつて其の行列を眺めるのを見て、冷然として笑つて、我が頸若し斷頭臺に登らば、此の群集は更に多くあつまるべし」と言つた。功名心の虚榮心でないことは、即ち是に由つても

知ることが出来る。功名心は必ずしも成功するとは限らない。時には成功することもあるが、又時には失敗することもある。併し、成功するにせよ

難破船



失敗するにせよ、とにかく功名心のあるものは幸福である。と云ふのは、功名心その物の中に幸福があるからである。功名心のある者は、眼前英雄と相對するが如く、常に其の心は倦まないのである。自分は此の英雄の爲した事業より、更に大きな事業を爲さねばならないといふ心を有つて居るから、春が去らず、少年の心が失せず、老が來ず、常に若々しい心を有つて居ることが出来るのである。

人生において希望ほど重要なものはない。たゞ一の希望があれば、大洋において呑天の波濤に圍まれた難破船の中

にあつても、水夫はなほ其の努力を廢しないのである。たゞ一の希望があれば醫師が其の術の盡きたのを自白しながらも、なほ病人の血脈の動く間は、方法を試みようとするのである。たゞ一の希望があれば、僧侶が最後の祈禱を捧げる時においても、囚人はなほ其の生を期するのである。こゝに希望があれば、こゝに生命がある。一分間の希望があれば、一分間の生命がある。功名心は、人をして無限の希望を懷かせるものである。無限の希望を懷く者は無限の青春を有するものである。(惜春雑話)

二八 國民と皇室

芳賀 矢一

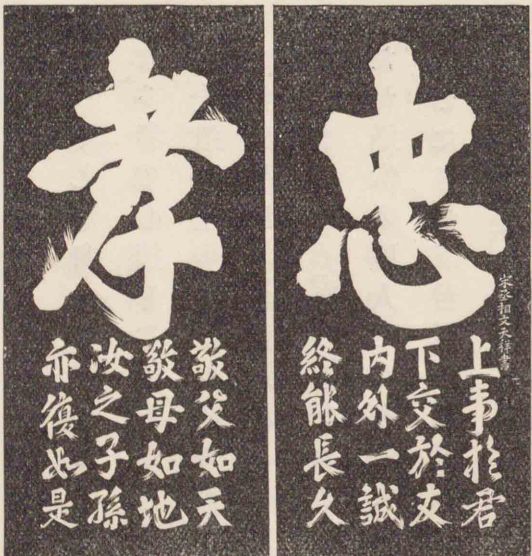
我が國は、開闢以來君臣の分がさだまつて居るといふことは、歴史上の事實の説明を待たずして、有史以前から我が民族の腦裏に沁渡つた思想である。

試みに神話を見よ。八百萬の神はあつたが、我が天孫にむかつて敵對行動を取つたものは無い。いづれもおとなしい忠義な神で、天つ神も國つ神も、日神の御子孫の事業を輔翼する事をのみ力めて居る。その事業を妨害したり、又はその國土を奪ひ取らうなどとするものは、一人も無い。誠に平和な神話である。此の神話は、我が太古の國民の心性を反映したものである。此の神話

この太古の國民の精神には、あきらかに君臣の分がさだまつて居る。天孫の御血統が即ち帝位を繼ぐべき種で、其餘の者は、皆此の國土に居て、その下に服従すべき種とさだまつて居る。皇室は一種別なものである。我等國民よりは一段高いものである。これは「カミ」である。長上である。神である。柿本人麻呂が「大君は神にしませば」と歌つたのも、「カミ即ち神」といふ上代思想を言表したのである。帝國憲法第三條に、天皇は神聖にして侵すべから

大君は云々
大君は神に
しませば天
雲の雷の上
にいまりせ
るか
(萬葉集)

ずとあるは、よく太古以來の國民の心を表したものである。皇室に對して敬虔の念を有することは、このとほりであるが、ただ神として恐れ畏むばかりでは無い。皇室の事を「オホヤケ」といふのは、大家の義である。皇室に對しては、我々は小家である、即ち皇室は我等の本家宗家であるといふ考があつた。この思想の中には、皇室と國民との間に、多くの親愛の意味がこもつて居る。統治者と被治者といふ關係ではなくして、心の底から上下互に親睦して居る趣がある。八百萬の神は、皇孫の事業を翼賛する方々ばかりであるが、義理づくに服従して、恐れて居るのではない。大本家の統領として、尊敬して居るのである。兩者は、親子的關係で結合して居たのである。子としては、親の命令を聽かねばならぬ。親の心を喜ばせねばならぬ。親からは何を與へられてもうれしい。親子の愛情は人の至情で、これが「マゴコロ」である。この「マゴ



コロ」が即ち忠である。忠といふ語は漢字の音であるが、日本語に譯すれば「マゴコロ」とするより外にあるまい。日本では忠も孝も同じ事で、どちらも同じく「マゴコロ」である。

この「マゴコロ」を以て皇室に對するが、國民の情である。神のやうに尊んで、神のやうに畏れ、親のやうに頼みにして、親のやうにありがたく思ふ。それゆゑ天皇の命とあれば、どんな事でも服従する、どんな事でもいひつけを聽く。いや／＼するのではない、有難がつてするのである。身命も喜んで差出すのである。

この「マゴコロ」即ち皇室に對する神の觀念が、武家時代に至つては、轉じて主従の關係の連鎖となつた。是が即ち武士道の精髓となつたのである。自分の事へる主君には「マゴコロ」をつくす、即ち忠をつくして身命を惜しまず、事ある時は馬前に討死するのが、家來たる者の心掛となつた。

武士道は士の守るものであつたが、この精神はいつしか武士といはず、町人といはず、男といはず、女といはず、一般國民の間に擴がつてしまつた。「奉公」といふことは、元來朝廷だけに對する事であつたが、通常の雇人にも「奉公人」といふ語を用ふる様になつた。其の本をたゞせば、君臣の關係が主従の關係にうつされた結果である。併し主従といつても、其の關係は、どうしても君臣の關係程にはないのである。もと／＼君臣の關係を、主従に借りてうつしたのであるから、従は主を、國民一般が皇室に對する様に、全く別人種

とは考へない、神と同一には考へない。權力なり、恩義なりの爲に服従するとの考は失せなかつた。

一旦主従の關係にうつされた忠の解釋は、明治の維新とともに、再び昔のとほり、皇室に對するものと限られてしまつた。否、明治の維新そのものは、その解釋を皇室に限るものとして、徳川幕府を打倒したのであつた。維新後は、士農工商は皆平等になつて、こゝに一般國民が兵役に就くことになつた。陪臣陪々臣の制度は廢せられて、いづれも天朝直參の臣となつた。久しい間武家で養成した武士道的精神は、今や天朝にむかつてのみ捧げられる事になつた。武士町人にも行渡つて、小説淨瑠璃の平民的文學にも反映して居る従の主に對する犠牲的精神は、いまや國家の爲に身命を抛つ愛國の精神となつたのである。

政體幾たびも變り王室屢更代する外國では、古來の歴史を思念

させ、國家的觀念を養成する必要上、獨逸ではゲルマニア、英國ではブリタニカ、佛國ではガリアといふ空想的人物を拵へて居る。ところが我が日本では、國土と皇室とは、神代以來已に離るべからざるものであつて、國のため家のためといふ事は同一の意味と解釋される。「朕は即ち國家なり」とは、我が國の天皇にして始めて宣ふことの出来る詞である。

從三位常昌

君が世をいのる心の誠をば

いつはりなしと神はうくらむ

鎌倉右大臣

山はさけ海はあせなむ世なりとも

君に二心わがあらめやも

二九 國民の歌

北原白秋

讃めよ 歌へよ 我が大御代を

仰げ 崇めよ 天皇てんかうを

おゝ 崇めよ 天皇を

彌榮いんさか 彌榮 彌榮えあれや

讃めよ 歌へよ 我が大皇子おほみこを

誇れ 喜べ 若き光を

おゝ 喜べ 若き光を

彌榮 彌榮 彌榮えあれや

讃めよ 歌へよ 我が國柄を

承けよ 傳へよ うまし山川

おゝ 傳へよ うまし山川

彌榮 彌榮 彌榮えあれや

讃めよ 歌へよ 我が音空を

統べよ 恵めよ 海の果まで

おゝ 恵めよ 海の果まで

彌榮 彌榮 彌榮えあれや

讃めよ 歌へよ 我が日の本を

奮へ 幸あれ われら國民

おゝ 幸あれ われら國民

彌榮 彌榮 彌榮えあれや

三〇 ベニスの商人

坪内逍遙

第四幕 第一場 ベニス法廷

公爵 アントニオとシャイロツク。兩人とも前に出い。

ポーシャ シャイロツクといふのはその方か。

シャイロツク シャイロツクは手前でございます。

ポーシャ その方の此の度の訴訟は奇怪な訟ぢや。しかし手續には

何の不都合もないから、ベニスの法律の表としては、その方を非

難することはできません……

(アントニオに) その方の生死は、原告に一任せねばならんのか。

アントニオ はい、さやうに申しをります。



行の雄

名に雄蔵
文が博士
早稲田大學
名譽教授

ベニスの商人

英國の劇詩
人シエクス
ピア原作

坪内逍遙譯

公爵
ベニスの公

爵
アントニオ
ベニスの商

人
シャイロツク

富裕な猶太人
ポーシヤ
年若い物知
りのドクト
ル實はバツ
サニオの妻

肖像
シエクスピア

ポーシヤ 證書に對して異議はないか。
アントニオ ございません。



が如くに降るものぢや。その徳澤は二重である。慈悲は之を
與ふる者に取つても幸福なれば、受けるものにとつても幸福な
のぢや。慈悲はもつとも偉い人に在つて、さらに最も偉い美德

ポーシヤ では、猶太人が慈悲を施
さんければならん。
シャイロック ならんとおつしや
るのは、どういふ據ない理由
がございますか。

ポーシヤ 慈悲は據なく施すべき
ものではない。慈悲は春の
小雨の自らにして地を潤す

となる。この徳が君主の胸に在れば、その光は金の冠にも幾倍
する。かの國王が手に持たせらるゝ笏は、ほんの俗界に於ける
威力や尊嚴の標章たるに過ぎないが、慈悲は目に見えぬ心の中
に宿る寶で、永世不滅の神の徳ぢや。随つて慈悲を以て正義を
和ぐるに及んで、政道が始めて天道に合ふのである。人間の力
がその時始めて神の力に似るのである。だから猶太人よ、お前
は頻に正義といふことを主張するが、正義ばかりで以て裁判し
たなら、我々どものうち、唯の一人として救を得るものはあるま
い。お互にあけくれに慈悲を祈る、その心を推し及ぼして、他人
に慈悲を施すのが人情といふものぢや。かやうに言葉を費す
は、その方の正義一邊の申立をなだめようがためである。それ
をお前が強ひて申し張れば、ベニスの厳格な法廷は、據なくそこ
にゐる商人に宣告を下さんければならん。

バツサニオ
ベニスの貴
族でアント
ニオの友

シャイロツク 手前が非分なれば命をお取り下さい。手前は正義を
要求します。證書通りの材料を要求いたします。

ポーシャ 商人は金をも拂はんのか。

バツサニオ いや、金は私が後に代つて支拂ひます。元金の二倍にい
たしまして。若しそれが足りませねば十倍にもして支拂ひま
す、私の手なり、首なり、心の臓なり、抵當にいたしましたも、それ
でも足らぬと申すやうでありますれば、正義呼ばはりは表向で、
底意は害心に相違ございません。願はくは政府の御権力を以
て、大義のために聊か法律を曲げられまして、この人非人を御掣
肘下されたい。

ポーシャ いや、それはできません。ベニス中の如何なる権力を以てする
も、定つたる國家の法令を改めることはできません。一度例を作る
と、それが原で種々の間違が續出して、長く國家の累となるから

さういふことはできません。

シャイロツク ダニエル様の再來だ。全くのダニエルさんだ。若い
には似合はん、恐れ入つた賢明な裁判官さんだ。

ポーシャ どうかその證書を見せてくれ。

シャイロツク はい、之でございます。憚りながら之にござりま
す。

ポーシャ シャイロツク、この金額を三倍にして返濟しようとして申して
をるぞ。

シャイロツク 誓言、誓言、手前は天帝に誓言しました。我が靈魂に虚
誓言の罪が負はされませうか。いや、それはベニス一國に代
へてもできません。

ポーシャ さてこの證書は、已に期限が切れてをるから、猶太人は之に
よつて、正當にその商人の胸元から肉一ポンドを切取る権利が

ダニエル
猶太の豫言
者
ダニエルと
は「余は審
判官なり」
の意

ポンド
英國の量目
約四百五十
四瓦に當る

ある。……慈悲をかけてやれ。三倍の金を受取つてこの證書を
予に裂かせてくれ。

シヤイロツク 證書面通りの支拂さへ濟みますればね。貴下はお立
派な裁判官さんでおあんなさるらしい。法律をよく知つてお
出でなさるらしいし、解釋の仕方もしっかりしたもんだ。わし
は貴下を立派な國家の法律の柱石だと思ひますから、その法律
を盾に、わしは貴下にいひます。ずん／＼裁判をなさい。靈魂
をかけて誓言します。人間の舌の力では、わしの心を變へさせ
ることはできません。是非證書通りに願ひます。

アントニオ 私も切に願ひます、どうか御裁判下されますやうに。
ポーシヤでは是非に及ばん。その方の胸へ彼が及物を受ける準備
をせい。

シヤイロツク お、公明正大な裁判官。若いに似合はん偉い人だ。

ポーシヤ 蓋しこの證書面に認めてある科料は、法律の意義並びに目
的上より見て、十分是認せらるべき性質のものである。……



シヤイロツク

シヤイロツク 全くその通り、お
お賢明な、公平な裁判官。
まあ、お前さんは、見か
けよりは、ずつとずつと老
成な偉いお方だ。

ポーシヤ それ故、胸元を開け。
シヤイロツク はい、胸でござい
ます。さう證書に書いて

ありますでございませう？ 「すぐ胸元より」と書いてございま
す。
ポーシヤ さやう……肉の重さを量る秤器はあるか。

シヤイロツク 準備してをります。

ポーシヤ シヤイロツク、其の方自辨で外科醫者を呼び寄せておけ、傷口をとめんと、出血のために命を失ふかも知れんから。

シヤイロツク そんなことが證書に書いてございますか。

ポーシヤ 書いてはないが、その位の情はかけるのが當然ぢや。

シヤイロツク 見つかりません、證書に見えませんか。

ポーシヤ 商人、何か申し残すことがあるか。

アントニオ たゞ聊か。覺悟はとうに致してをります。……バツサニオさん、お手を。御機嫌よろしう！私が貴下のためにかういふことになつたからといつて、歎いて下さるな。運命の神が、私に對してはまだしも深切にしてくれます。不幸な人間を零落させて財産に離れさせながら、一思ひに死なせもしないで、額に皺を湛へた凹んだ目で、我と我が貧窮を眺め暮させるのが例であ

るのに、その悲惨だけはまぬがれさせてくれます。どうぞ奥さんへよろしく。アントニオはどうして死んだか、どんなに貴下を愛してゐたか、有體に懇にお話しなすつて、奥さんに判断して貰つて下さい。嘗てバツサニオさんに一人の心友があつたといへるかどうかを。貴下が親友を失つたと悔んで下されば、わたしは貴下のために負債を拂ふのを決して悔みません。その證據には、若し猶太人がずっと深く切れば、笑みを含みてわたしは眞に全心を傾けて拂ふのです。

バツサニオ アントニオ、わたしは今現に生命其のもの程に大切な妻を娶つてゐる。けれども生命其のものも、其の妻も、全世界も、わたしに取つてはお前さんの命以上に貴いものではない。わたしは何もかも棄ててしまふ。みんな犠牲にしてかまはないからどうかしてお前さんをこの惡魔から救ひたいのです。

ポーシヤ (獨言のやうに) 若し細君が傍にゐて、さういふことをお前が
いふのを聞いてゐたら、餘り有難がりもすまいね。

グレシヤノ
ベニスの紳
士トニオ・アン
友ツサニオの

グレシヤノ わたしにも妻があつて、それを非常に愛してゐるんだが、
いつそ死んで天にゐたら、言傳てをして神様に直訴して、この狼
のやうな猶太人の心を入れ替へさせて貰ふのになあ。

ネリツサ
ポーシヤの
侍女

ネリツサ (獨言のやうに) さういふことは、細君に聞えない所でいはな
いと家庭に風波が起りますよ。

バラバス
強盜

シヤイロツク 基督教信者の男どもは皆あれだ。おれにも一人娘が
ある。基督教信者を夫に持たす位なら、バラバスの血統のもの
に連添はせた方がましだ！…時間が費えます。どうか御宣告
を願ひます。

ポーシヤ そこにゐる商人の肉一ポンドはその方の物である。法廷
が之を是認して、法律が之をその方に與へる。

シヤイロツク 公明正大な裁判官！

ポーシヤ すなはちその方自ら手を下して、彼が胸元からその肉を切
取らねばならんぞ。法律は之を許可し、法廷は之を是認する。

シヤイロツク 最も博學なる裁判官！…宣告だ！覺悟しろ。

ポーシヤ ちよつと待て。まだ申すことがある。此の證書には血は
唯一滴たりともその方に與ふると書いてない。明瞭に「肉一ポ
ンド」とのみ記してある。然る上は證書面通り肉一ポンドを取
れ。しかしながら若し之を切取るに當つて、基督教信者の鮮血
を唯一滴でも灑ぐに於ては、その方の地所も家財もベニスの國
法によつて、悉く之をベニスの國庫に沒收いたすぞ。

グレシヤノ お、公明正大な裁判官！どうだ猶太人。お、博學なる
裁判官！

シヤイロツク それが法律でございますか？

ポーシヤ 自分の目でその条文を見るがよろしい。畢竟その方が偏に嚴重な證書面通りの裁判を申し乞ふが故に、おのれが望以上の嚴重な裁判を受けなければならぬのぢやと覺悟をせい。

グレシヤノ おゝ博學なる裁判官！ どうだ猶太人。成程博學な裁判官さんだ！

シヤイロツク では彼の申出通りにします。證書を三倍にして拂へば、あの基督教信者を赦してやります。

バツサニオ その金はこゝにある。

ポーシヤ 待て！……猶太人はあくまでも法律の明文通りの裁判を要求してゐるのである。待て！急ぐには及ばん。猶太人は料料以外何物をも受取るべきでない。

グレシヤノ おゝ猶太人！公明正大な裁判官、成程博學な裁判官！

ポーシヤ であるから、肉を切取る準備をせい。血を流してはならん

ぞ、又肉はちやうど一ポンドより以外、多くも少くも切取ること
はならんぞ。若し聊かでもちやうど一ポンド以上、又は以下を
切取るに於ては、よしそれが、たかが一分又は一厘程の輕重であ
るとも、いや唯髮の毛一筋だけの量目の差を秤皿の上に生ずる
に於ては、その方の命はないぞ。その方の財産は悉く國庫に没
收致すぞ。

グレシヤノ 今ダニエルさんだ、成程今ダニエルさんだ！ どうだ。

罰當り、降参したらう。

ポーシヤ なぜ猶太人は躊躇してゐる？ 料料を取れ。

シヤイロツク 元金だけを受取つて歸らせて貰ひたい。

バツサニオ とうから渡さうとしてゐるのぢや。こゝにある。

ポーシヤ いや、彼は公の法廷に於てそれを受取らんと申したのであ
る。彼は唯法律通り、證書通りの料料の外を受取るとは相成

らん。

グレシヤノ いよ／＼以てダニエルさんだ、今ダニエルさんだ！お、猶太人、好い言葉を教へてくれて有難う。

シヤイロツク 元金だけでも受取れませんか？

ポーシヤ その方が受取るものといつては、命がけで切取るべき料の外にはない。

シヤイロツク では、うぬ、どうとも勝手にしやあがれ！ もう論判はむだなこつた。

ポーシヤ 待て、猶太人。その方にはまだ法廷の御用がある。ベニス市の法律によると、外國人が直接若しくは間接の方法を以て、當ベニス市民を殺さうとした場合に、それが露顯に及べば、その財産を二分して、被害者たらんとせし者はその一半を取り、他の一半は國庫に沒收する規定である。さうしてその犯罪者たる者

の一命は、偏に公爵の御仁恕に任せ、何者も之に對して異議を申し立てることのできんことになつてゐる。その方の罪狀は正にそれに相當する。直接又間接にそれにある商人の命を奪はんと企てたことが明瞭であるから、只今申し聞かせた罪科をまぬがれんぞ。であるから、速に土下座をして、公爵のお慈悲をお願い申せ。

グレシヤノ 自分で首を縊つて死ぬお許しでも願ふがい。しかし財産は悉く沒收されてしまふのだから、繩を買ふだけの餘裕もないだらう。だから、政府の費用で以て首を縊つて貰はんければなるまい。

公爵 われ／＼の精神のその方と異なることを知らせるために、願を聽くまでもなく、その方が一命は赦してやる。さて財産は、一半はアントニオに取らせ、他の一半は國庫に收める。但し全く悔

悟すれば、或は科料だけで差赦すかも知れん。

ポーシヤ さやう、アントニオの分は格別として、國庫へお收めの分はさやう致してもよろしうございます。

シヤイロツク いゝや、命も何もかも取つて下さい。赦して貰ふには及ばん。家を支へてゐる大柱を取られるのは家を取られるのだ。生活の資本を取られるのは命を取られるのだ。

ポーシヤ アントニオ、その方は彼に對して何等かの慈悲を掛けて遣はす氣か。

グレシヤノ 無料で首縊る繩を一すぢ。その他に何がやれるものか、あの罰當りに。

アントニオ 憚りながら公爵閣下を始め、御列席の方々へ。猶太人が財産の一半は科料でお赦しになりますやう願ひます。残る一半は、若し當分の間手前に預け置きくれますれば満足致しま

法廷の場



す。右は猶太人の死後に至りまして、先頃彼が娘と結婚致しましたロレンゾと申す青年に引渡すことに致します。尙別に

二箇條の願ひがございます。すなはちこの御仁恵に對して、彼が速に基督教信者に相成るといふこと、次に死後一切の財産を娘夫婦に譲るといふ證書をこの法廷に於て認めまするやうおひつけを願ひたうございます。公爵 その通り申し附けよ

う。若し否むに於ては、只今いひ渡した赦免をも取消す。
ポーシヤ 猶太人、よろしいか？ どうぢやな？

シヤイロツク よろしうございます。
 ポーシヤ 書記役、財産譲渡の證書を。
 シヤイロツク どうかお暇を下さいます。病氣でございます。證書
 は後からお送り下さい。宅で記名いたします。
 公爵歸つてよろしいが、命令通りに致せ。
 グレシヤノ おい洗禮を受けるには立會人が二人要るぞ。だが、若し
 おれが裁判官であつたら、立會人をもう十人ふやして、貴様を洗
 禮盤よりも絞罪臺へつれていつたものをなあ。
 (シヤイロツク入る。)

(ベニスの商人)

中學新國文 卷五終

挿繪筆蹟 卷五

二頁 東郷平八郎筆蹟

光華明彩之神徳也

東郷平八郎書

七頁 今上陛下御製

世の中もかくあらまほしおたやかに
朝日にほへるおほうみのはら

東宮侍從長入江爲守敬書

一七頁 契沖筆蹟

日のもとの國をしつめて動なきふし
のたか根の鳴澤のいし

一七頁 蘆庵筆蹟

やま吹のさかりとなればやへくくの
人もとひけりたま川の里

一八頁 廣足筆蹟

聞レ狄

一八頁 廣足筆蹟

秋風のよなく寒く吹なへにうらさ
ひまさるをきの音かな

一九頁 蓮月筆蹟

廣足

三三頁 松平樂翁筆蹟

山さとはまつの聲のみきゝなれてか
せふかぬ日はさひしかりけり

九七頁 蕪村の俳畫

あらしふくけさにおもへはひとはち
る秋こそ冬のはしめなりけれ

一五九頁 文天祥筆蹟

女俱して内裏拜んおほろ月

忠 宋丞相文天祥書

上事ニ於君ニ 下交ニ於友ニ
内外ニ誠ニ

孝 敬レ父如レ天 敬レ母如レ地
汝之子孫 亦復如レ是

昭和七年六月十日印刷
 昭和七年八月十二日訂正印刷
 昭和七年八月十五日訂正發行

中學新國文

全十册

卷數	定價
一・二・三・四・五	各金六拾五錢
六・七・八・九・十	各金五拾五錢

編者

笹川種郎

發行者

東京市神田區仲猿樂町三〇番地
 株式會社 帝國書院



印刷者

東京市牛込區山吹町一九八番地
 代表者 增田啓策
 山本禎男

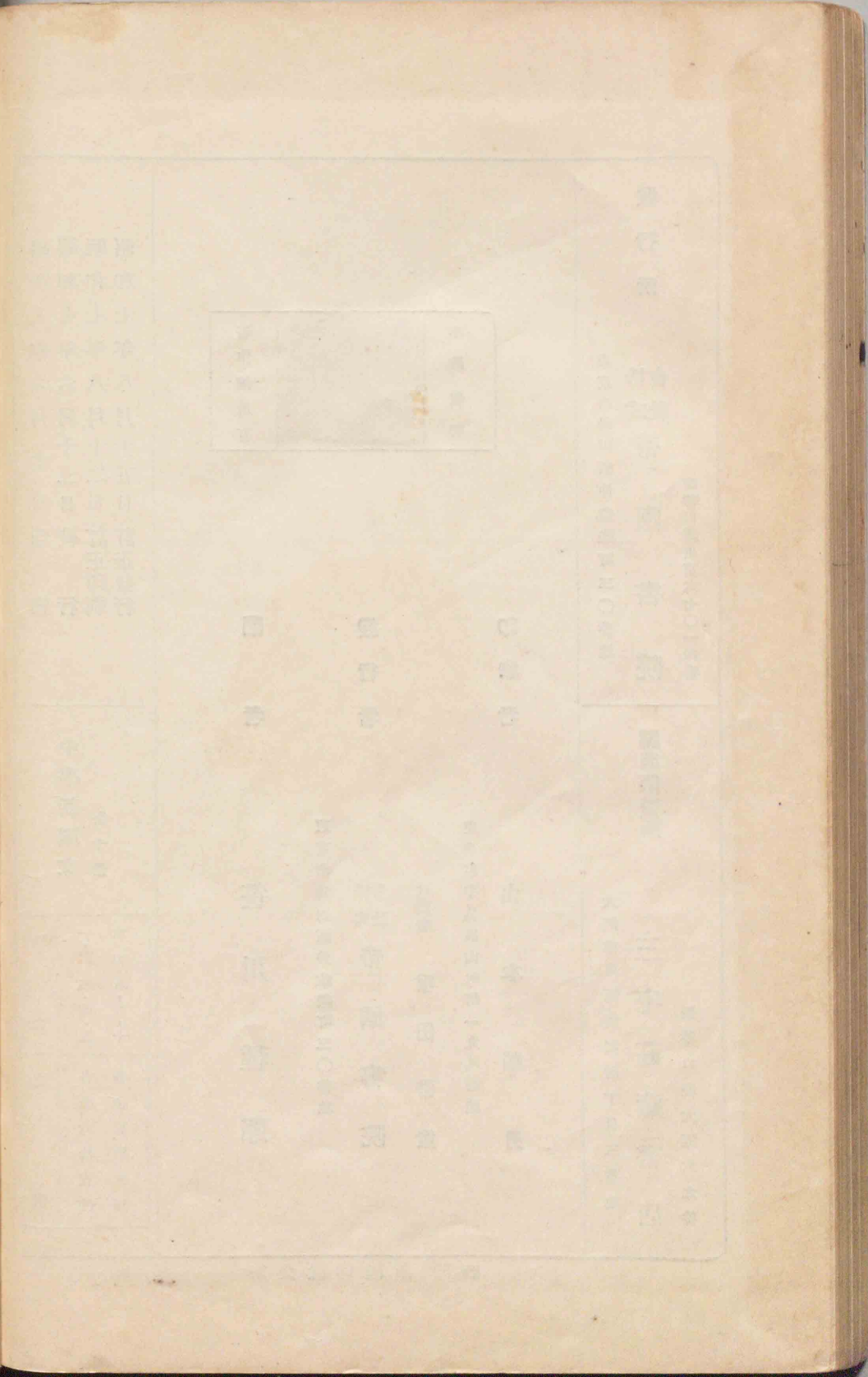
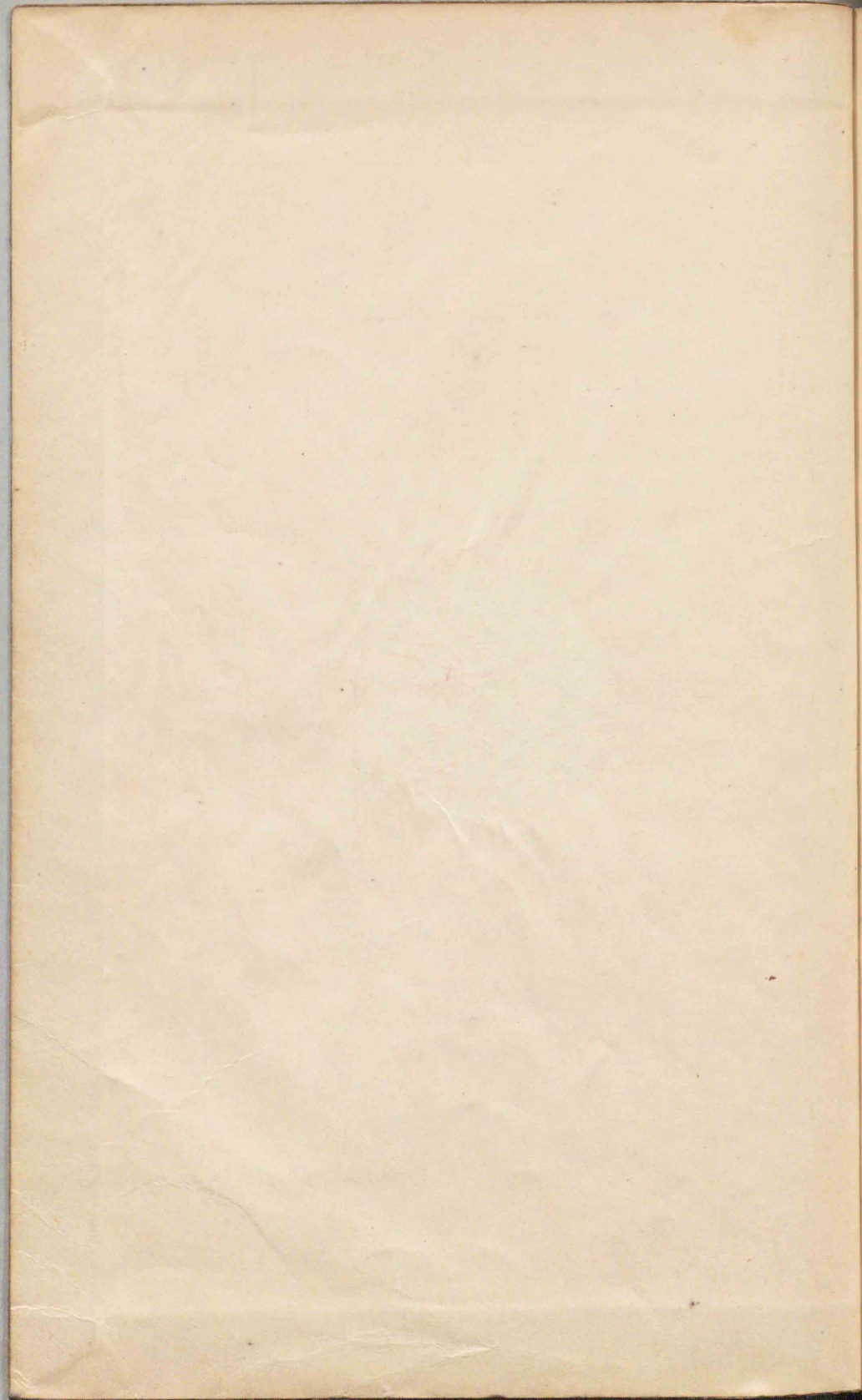
發行所

東京市神田區仲猿樂町三〇番地
 株式會社 帝國書院

振替口座東京六七〇一四番

關西販賣所

大阪市東區橫堀四丁目三番地
 三宅莊藏書店
 振替口座大阪六九番



廣島第二中學校

第三學年第一回演習

平井泰之

